



Title	国民的独立のパスとロゴス (3・完) : ドモフスキのパトリオティズム1893-1908年
Author(s)	宮崎, 悠
Citation	北大法学論集, 57(5), 400[133]-342[191]
Issue Date	2007-01-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/20524
Type	bulletin (article)
Note	研究ノート
File Information	57(5)_400-342.pdf



[Instructions for use](#)

国民的独立のパトスとロゴス（3・完）

——ドモフスキのパトリオティズム1893-1908年——

宮 崎 悠

目 次

はしがき

第一章 ドモフスキ研究の現状

- 第一節 研究史
- 第二節 ポーランド国外の研究状況
- 第三節 現代ポーランドの研究動向

第二章 全ポーランド主義の形成

- 第一節 なぜ全ポーランド主義なのか
- 第二節 『我々のパトリオティズム』
- 第三節 革命的プログラムの提言

(以上、第57巻2号)

第三章 シュラフタ国家からの民族的再生

- 第一節 西欧体験と社会ダーウィニズム
- 第二節 『一現代ポーランド人の思想』
- 第三節 民族の気質

(以上、第57巻3号)

第四章 闘争のロゴス

- 第一節 プログラム転換
- 第二節 ポーランド人とは誰か
- 第三節 リアリストの04年革命

第五章 未成立国家の外交構想

——『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』を中心に——

- 第一節 誰を敵とするのか
- 第二節 新しい帝国
- 第三節 ホーエンツォレルン国家の拡張
- 第四節 影響力の政治
- 第五節 未成立国家の外交構想

むすび

(以上、本号)

第四章 闘争のロゴス

はじめに——リアリズム対教条主義——

我々の社会には、二つの正反対の考えが存在している。それら二つの志向、二つの教義の間に戦いさえ生じている。それは政治的思想と、非政治的思想との戦いである。そして政治的リアリズムと、革命派・服従派・人道主義派といった、あらゆる教条主義との戦いである。⁽¹⁾

1903-05年は、ドモフスキの政治思想にリアリズム志向が明確に示され、かつ、リアリズムが内外の政治過程における彼の組織原理として結晶化された時期であった。それはポーランドの自治ひいては独立への動きが、現実の政治的力として、ポーランド内外で広く発見され、同時にナショナリズム運動の担い手たちが現実政治と不可避的に直面させられた時期に重なり合う。そして当然に、ポーランド社会における諸政党・諸派間では、理念上・路線選択上の対立が先鋭化した。そのなかでドモフスキは、ロシア政治への積極的介入と国際外交活動への参画による政治的リアリズムの遂行をロゴスとした。換言するなら、独立へのパッションを抱きつつ、それを真にポーランド民族の独立に役立てるために、ロシア帝国における国内状況や国際状況に照らして合理性を備えたプログラムを準備し実行することを主張した。

文頭に引用した「政治におけるドクトリンとリアリズム」（1904年8月）や、
北法57(5・399)2405

それよりやや早い時期に書かれた「祖国とドクトリン」(1902年5月)、「ロシアの危機に対して」(1903年2月)⁽²⁾といった論説からは、当時の彼の状況認識における変化を読み取ることができる。彼は、1902-03年にかけて、ロシアの内政・外政における危機がもはや「明白かつ多方面にわたる」⁽³⁾ものと看取するや、「今日、ほぼ確信をもっていえるのは、ロシアにおける現在の危機が、国家体制により深刻な跡を残さずして過ぎ去りえない、ということである。…(危機は)あまりに深くロシアの一般社会全体を揺るがし、国家の生存や組織の基礎そのものに関わる」⁽⁴⁾として、従来のロシア政治に対する見方を変化させた。換言すれば、彼のリアリズムは、ロシアの危機的変動に対応するために形成された思想であったといえよう。

他方、ポーランド内部の状況認識については、文頭の引用に示されている政治的リアリズム対教条主義という対立構図のように、ポーランド社会の政治勢力・非政治勢力の分布を、民族の力を正しく認識するか、そして現実の政治を変えるか、という基準によって二分している。これは、彼の思想において政治的リアリズムが独自の位置を占めつつあることの表れであった。

19世紀末から20世紀初頭のロシア領ポーランドにおいて、ドモフスキら国民民主党は民族主義的かつ非武装の政治運動を行う立場をとっていた。他方、「革命派」と表現されたポーランド社会党などの社会主義諸党派は、「プロタリアートの連帯」によりロシア帝国の打倒を目指す運動を行っていた。さらに主要な集団として、政治には関与せず、経済・文化活動においてポーランド民族の存続をはかる「服従派」あるいは「忠誠主義者」などと呼ばれる保守派がいた。

ドモフスキは、ここで、自らの立場を政治的リアリズムと位置づけ、他の立場は全て「教条主義」と一括して批判する。「教条主義」は、「祖国とドクトリン」(1902年5月)が次のように類型分けしている。⁽⁵⁾

「教条主義」と批判される類型の第一は「正義の王国」論、すなわち「正義の教条主義」である。⁽⁶⁾それは、「国際関係において必ず正義が勝利すると信じるよう我々に命じ、また、そうした正義の勝利を早めるため、各方面で正義を行うよう、我々自身にも命じる」ものとされる。つまり、ポーランド民族が侵略や収奪を行いうる場合があってもそれを行わず、かつて自分たちが手に入れたものは返却し、他方で、自分たちから何かが収奪される場合には抵抗せず、もぎ取られたものを奪い返したりもしない、けれども、「正義の王国」が到来するまでひたすら待とう、という考えをさす。これは、道徳的には崇高であって

も、現実においては徹底した政治に対する無力感を表しており、受動的に正義がなされる日を待ち続ける「正義の教条主義」である。⁽⁷⁾

第二に、上記の教条主義とは「遠いが、確かな親類関係」にあると批判されているのが「社会主義的な教条主義」⁽⁸⁾である。両者は「正義」の信仰で似通っている。すなわち「社会主義的な教条主義」は「現在また将来における国際的なプロレタリアートの連帯」を宣言し、ヨーロッパ全体でプロレタリアートが勝利しさえすれば「ポーランド問題を「正義の原則において」処理してくれると信じる」よう人々に強いる教条主義である。⁽⁹⁾

社会主義的な教条主義によれば、今日、一つの集団として民族を考える必要はなく、民族の結合力を強める必要もない、という。むしろ、それ〔ポーランド民族の結合力〕を打ち砕き、労働する諸階層と、社会の残りの部分とを結ぶ道徳的な結びつきを切断し、他方で、労働する諸階層を他の諸国のプロレタリアートと合わせて一つにする必要がある、という。…「社会主義的な人民共和国」としてのポーランドには、確かな未来があるのだから、それを信じ、もっぱらそれに期待し、プロレタリアートの勝利を早めるために、今日の我々の道徳的基礎を破壊し、民族的理念を根絶しなければならない、等々という。⁽¹⁰⁾

さらに「社会主義的な教条主義」の対極には「スラヴ的教条主義」⁽¹¹⁾がある。これは、ポーランド民族の救済を、「より大きなスラヴ族としての連帯にある」と宣言する立場であり、皮肉なことにポーランド人以外のスラヴ人（主にロシア人）に対する認知度が最も低く、対照的にドイツ人との関わりが最も多いプロイセン領ポーランドにおいて普及しているものである。「一族の中で最も強大なメンバーの優越のもとに、つまりロシアの優越のもとに」連帯を結ぶことを当然の前提とし、⁽¹²⁾さらに、「ロシアとの関係において過去のあらゆる傷跡を忘却することのみならず、今日ロシアから味わっているあらゆる不正な仕打ちに目を閉じるよう勧めている」立場として説明されている。⁽¹³⁾

これと同類の、より悲観的なものとして、「ロシアとの直接的同盟の教条主義」⁽¹⁴⁾が挙げられている。それは、ポーランド民族には、「政治的独立を取り戻すための最低限の環境もなく、歴史の宣告によって、ロシア国家の国境内での生存が言い渡されている」という「明白な事実を出発点とする」もので、「ロシ

ア政府影響下での、古く、もしかしたら居心地がよいかもしれないロシア国家との妥協を志向するよう勧め…相互の誠実な行いによって」、ロシア政府の信頼を獲得するよう勧めるものである。こうした論理から、ポーランド民族は、ロシアに抱擁（併呑）されるという不可避の結末が待っていることを知りつつ、不興をかう可能性は論じずに、その寵愛のみを信じ、すすんでロシアの抱擁の中へ身を投げ出すべきだ、とする「教条主義」が生まれる。⁽¹⁵⁾

これら代表的な教条主義の諸類型⁽¹⁶⁾に対しては、第一に、民族主義の歴史を動かす力を正当に評価することを知らず、反対に、「正義」、「社会主義的連帯」、「スラヴとの連帯」など政治的力にならない空疎な理念への過大評価があると批判されている。そして第二に、「正義」の教条主義は無為に救済を待ち続け、「社会主義」の教条主義は民族という枠そのものを解体するため、ポーランド民族の生存と独立には政治的に役立たない、と批判されている。先述のように、ドモフスキにおけるリアリズムとは、民族の利害のために現実の政治過程においてとりうる方策を選択し実行するための政治的選択をさす。そのため、彼にとっては、革命派も忠誠派も、民族的独立を他者に依存し現実のポーランドをトータルに動かすための主体性を放棄し、ポーランド政治から遊離してひたすら架空の理念に情緒的にしがみつき、現実を超え出る政治的ロゴスを欠くものとみなされており、そのために「教条主義」として一括して批判されている。

換言すれば、ドモフスキは、ポーランド政治における勢力配置図の認識そのものの転換をとこなえていた。「政治におけるドクトリンとリアリズム」(1904年)において「ロゴスの欠如」が批判されている一方の極には、武装蜂起によるポーランド独立を目指す革命派があり、その対極には、忠誠主義があった。しかし武装蜂起主義対忠誠主義という対立軸はもはや、時代錯誤であり、その政治的内実は存在しない、と彼は主張する。彼は、「実際のところ、今日、我々の社会には、絶対的な革命主義者も、絶対的な忠誠主義者も、存在しない。どちらかの極端の原理に信服している信奉者たちは存在しない」として、忠誠主義と、革命主義との対立を、「不誠実で論争的な策略」であるか、「空理空論の、問題の単純化であり、少しも事柄を明らかにしないどころか、反対に、政治思想全般をまどわせるものである」⁽¹⁷⁾と断じている。なぜなら、「少なくとも、有力な、組織された、指導的なスローガンに従って恒常的に活動を行っている集団という意味では」忠誠主義者の集団も革命主義者の集団も共に存在せず、「時として社会主義者たちは、武装蜂起に向けた準備について語っているが、彼らは、[実

際には] そうした領域で何の活動もしていない。反対側の立場においては、忠誠主義に偏執する人々や、徹底したモスカル好き達の小集団があるが、いずれも〔政治勢力として〕何の意味ももたない⁽¹⁸⁾からである。したがって、忠誠主義対革命主義という対立の図式は、「政治的^{アナクロニズム}「時代錯誤」であるか、または、古い戦略を新しい活動手段にしようと、粗悪な繰り返しをしているにすぎない⁽¹⁹⁾と彼は認識していた。

ここでドモフスキは、「時代錯誤」に陥った政治のあり方を覆そうと試みている。彼の見解においては、ポーランド社会において対立しているのは、革命派と忠誠派ではなく、政治的リアリズムと、机上の空論と化している様々な「教条主義」のすべて、であった。この文脈において、リアリズムと、政治的思考、政治的なるものとは、同一視されている。ドモフスキの政治的リアリズムは、現実の政治過程において、ポーランドの独立という大目的のためにどのような手段をとりうるのかを、ロゴスに則って思考しかつ実行することを求めていた。

本章第一節において詳述するように、国内政治においては、彼の指導する国民民主党のプログラムの転換を行い、従来の伝統的な武装蜂起主義と名実共に決別した。また、こうしたリアリズムへの転換の直後、日露戦争が勃発したことを機に、敗戦に苦しむロシア政府への対応をめぐって、武装蜂起による政府打倒を唱えるポーランド社会党と対立し、「服従派」に転向したとの誤解や非難を受けることとなった。⁽²⁰⁾

また、彼の思想においては、権力政治の現実を冷徹に認識するリアリズムと同時に、民族への献身を厭わず、民族的独立を求める意識としてのパッションとが共存していた点にも注意しなくてはならない。本章第二節において詳述するように、彼の思想におけるパッションは、その民族観の基礎であった。彼にとってポーランド民族を構成するものは、言語－エスノの要素もさることながら、一つの生命体として類推される、総体としての民族への献身であった。

そして第三節において述べるように、ドモフスキのパトリオティズムに内包されるロゴス的側面、リアリズムは、彼が指導した国民民主党のプログラム変更（1903年）や日露戦争（1904-05年）への対応、ロシア内に出現した政治空間の活用といった現実政治における対処といった歴史的出来事を軸に、明確化されていく。

第一節 プログラム転換

ドモフスキが『我々のパトリオティズム』（1893年）を発表して以降の十年間に、彼が活動拠点とする民族連盟は、その路線を大きく修正しつつあった。その変化を象徴する出来事が、国民民主党のプログラム（政治綱領）における方針転換（1903年）であった。国民民主党は、民族連盟を地下母体とする政党であり、ロシア領ポーランドを拠点としていた。⁽¹⁾ 1903年に出された新たなプログラムの特異な点は、1897年に発表された当初のプログラムにおいて主張されていた、民族主義的な武装蜂起を批判したことにある。そのため、民族連盟は、主としてポーランド社会党など他の政治グループから、「服従派」寄りになったという批判をうけることとなった。

こうした批判は、国民民主党のみならず、ドモフスキ個人にも向けられた。『我々のパトリオティズム』以降、民族連盟内で主導的立場にあった彼が、1903年の国民民主党プログラムを執筆したためである。⁽²⁾ このプログラム転換を契機として、彼は、「服従派」と変わりないという批判を受けるようになった。また、後年のドモフスキ研究においても、このプログラムは、ドモフスキが親ロシア的な態度に転じたと解される原因となってきた。

ただし、以下で詳述するように、1903年のプログラム変更を単なる武装蜂起の放棄やロシア追従志向と解してしまうのは早計であり、ドモフスキ自身それを意図していたのではなかった。では、彼はなぜ、こうした誤解を招きかねない内容のプログラムへと、あえて方向転換したのであろうか。

本節においては、国民民主党がプログラム変更を行うに至った社会的背景を検討する。そして、ドモフスキが武装蜂起を批判し、ロシア内政への働きかけを重視した論理を明らかにする。

・ドモフスキ思想の展開と民族連盟

民族連盟の最初のプログラムは、ジグメント・ミウコフスキが1887年に執筆したもので、「既存の合法的・公的関係・機構にまっこうから対抗する」ものと評されていた。⁽³⁾ その政治観の特徴としては、非合法活動の推進と、「止むことなき長期的革命」⁽⁴⁾の提唱が挙げられる。さらに、初期の民族連盟が持っていたもうひとつの特徴は、20世紀初頭まで、彼らが武装蜂起を唯一の独立達成の手段と見なしていたことにある。⁽⁵⁾ より正確に言うなら、少なくともロシア領

ポーランドにおいては、党派に関わらず、ポーランド人の政治活動といえば蜂起或はその準備を意味する、との認識が共通していた。武装蜂起という伝統への執着によって、ポーランドの政治活動・独立運動は、影響をこうむってきた。それを主要な手段とすることに反発する人々であっても、19世紀ロシア領ポーランドの政治過程においては、それを考慮に入れざるを得なかったし、多くの場合、そういった人々も、自覚している以上に伝統的な武装蜂起主義に影響されていたのである。

それだけに、武装蜂起を政治活動の「手段」から排除するまでには、民族連盟内部において葛藤が続いた。以下に引用した1901年7月号『全ポーランド評論』紙には、その様子が反映されている。⁽⁶⁾

ポーランドは、平和的な方法においては決して再建されないし、
〔ポーランドを〕独立回復へと導くためのあらゆる政策は、決定的な瞬間において、プログラムの中に武装闘争を含んでいなくてはならない、と人々は我々に言う。我々自身、それはよく理解している。しかし、その真実を認識しているということと、蜂起政策をとることとの間には、距離がある。⁽⁷⁾

民族連盟としては、ポーランドの独立を目指しており、そのためには、最終的に支配帝国と武力によって衝突する可能性もありうるという認識をもっていた。しかし、独立のための武力闘争の重要性は認めても、それを即効性のある手段として、今すぐに用いるべき方法とすることには否定的であった。武力による戦いの重要性を認めたからといって、現段階において武装蜂起を計画し実行することは、論理に飛躍がある、というのである。

ポーランド独立という目的に対して武装蜂起は合理的な手段ではない、と認めること自体が、当時の民族連盟の方針上、かなりの混乱を招いた。それどころか、民族連盟は、最終的に蜂起を断念した結果、解決不能な問題に陥ることとなった。蜂起を断念するという変更の際して、民族連盟の指導者たちは、無理にでも、独立をかけた戦いのために蜂起に代わる手段を見つけねばならなかったためである。ポブクマリノフスキは、実際のところ蜂起の他に手段が見つからなかったため、民族連盟は無意味な美辞麗句を用いざるを得なくなった、として、新しいプログラムを全く評価していない。⁽⁸⁾ こうしたポブクマリ

ノフスキの見方は、蜂起という手段を除外した後の選択肢を、帝国支配への服従に収斂したものと解してしまっている。

確かに、ポブク-マリノフスキが批判するように、民族連盟の主張は、一見論理一貫性に欠けていたかのようである。しかし、それは同時に、常に変化する政治状況を現実的に認識し、それに基づき適切な方法をとろうとする意志の表れであったと解することもできよう。ドモフスキは1893年の時点で、蜂起に代わる手段として「止むことなき長期的革命」⁽⁹⁾を提唱していた。つまり、蜂起という限定的な場においてのみ兵士として戦うのではなく、日々続いてゆく政治過程において、間断なく独立への活動を継続するべきではないか、という提案である。その提案を、彼は1903年のプログラムに織り込み、今度は党の活動方針として再び表明したのだと解するべきであろう。独立闘争の手段として効果の見込めない武装蜂起を批判し、ロシア内に生じた政治空間の可能性を捉えて政治活動を展開しようとする基本姿勢は一貫していた。したがって、1903年のプログラムを「服従派」的とする解釈は、そうした現実主義的な思考を看過あるいは過小評価しているといえる。

19世紀後半のポーランド社会の状況をおおまかにとらえるなら、一方において、伝統的な抵抗の手段であった武装蜂起は、(とくにロシア領ポーランドにおいて)ポーランド人の政治活動と切り離せないものと考えられていた。しかし、その対極には、分割された状態のまま経済・文化活動を発展させ、それによってポーランド民族の地位を高めていこうとする「有機的労働」⁽¹⁰⁾の考えがあった。とくに一月蜂起が鎮圧されて以降は、敗北感と無気力が蔓延し、知識人や有産階級の間有機的労働を推奨する傾向が広まっていた。

ドモフスキは、1893年にすでに伝統的蜂起主義を批判しており、武装蜂起は目的合理性を欠く活動手段であるという姿勢を貫いていた。この点で、彼の立場は一見、「有機的労働」を支持する所謂「服従派」と同じであるかに見える。ただし、「有機的労働」を推進する人々となる点は、彼が独立を長期的かつ現実的な目標としていた点にあった。

さらに、新しいプログラムにおいて、ドモフスキは、ロシア領ポーランドだけを独立闘争の主体とすることに異を唱えた。つまり、プロイセン領ポーランドやガリツィアも、ポーランドの定義に含めるという主張である。こうした志向をもつ人々は、「全ポーランド主義者」と称された。⁽¹¹⁾ロシア支配下におかれて以来、合法的な政治活動が許されなかったために、武装蜂起によってロシア

支配を打倒する、という筋書きは、ロシア領ポーランドの政治活動において、当然の前提として固守されていた。したがって、ドモフスキが主張した、ドイツが東方へ進出すればドイツに同化される恐れが高まるのだから、それを防ぐためにロシアを破綻させずに民主化し、ロシア内で自立ひいては独立しよう、という考えは、聞く者に違和感を与えたであろう。にもかかわらず、そのリアリズムゆえに、ドモフスキの全ポーランド主義は民族連盟の中で着実に支持を広めていた。

1893年の『我々のパトリオティズム』が提示した思想は、十年間で民族連盟内の主流となった。そして、国民民主党は第一にロシア領ポーランドを活動の中心とし、それに加えてドイツ領ポーランドやオーストリア領ポーランドでも活動するという、ドモフスキの抱いていた構想が、国民民主党の方針として公にされたのである。⁽¹²⁾そこにおける武装蜂起の否定は、全ポーランド的な志向の明確化と、それに対する支持の拡大という背景の上で、示されたものであった。

第二節 ポーランド人とは誰か

ドモフスキの思想における重要な特徴の一つは、「全ポーランド主義」と呼ばれる考えにあったことは上述のとおりである。これは、三支配帝国によって引かれた国境線と、階級の格差とを超越し、ポーランド民族の統合を目指すという主張であった。「全ポーランド主義」は、どの領域がポーランドとなるのか、ならないのか、誰がポーランド民族の構成員となるのか、また民族的精神の共有を熱望する意思という、パトスの有無の問題を、必然的に引き出すものであった。そして、ポーランド人やポーランド民族といったものの定義が必要となるに伴い、他の諸民族の位置づけにかんする問題が生じるのは不可避であった。

こうした一方、ドモフスキの思想に内在するリアリズム、ロゴスの側面が、武力行使を伴わない政治的な活動を通じて独立を目指すという方針に表明されていることについても、すでに述べた。これは、19世紀末ロシア領ポーランドにおいて独立を目標とする政治活動と切り離せなかったロマン主義的蜂起主義を批判し、なおかつ、一月蜂起の鎮圧後に優勢となった「服従派」の唱える「三面忠誠主義」にも反対する、というものであった。

これら二つの特徴には、リアリズムとパトスつまり民族的独立への意識との

共存が示されている。こうした共存は、社会主義諸派や服従派の立場にはみられないものであり、彼の思想の特異な点であるといえよう。そこで、この節では、前者、ドモフスキの思想がもつリアリズムに注目し、その思想的基礎となっているドモフスキの民族観を押さえ、次章において彼のドイツ警戒論を分析するための前段とする（第五章）。

・民族とは何か

1895年に『全ポーランド評論』（3月5日号）に掲載された「民族の一体性」という記事において、ドモフスキはポーランド民族という集団が存在する根拠について述べている。

我々は、ひとつの民族である。単一の、不可分の民族である。なぜなら、我々は、自分たちが統合されているという感覚を有しており、共通の集団意識を、共通の民族的精神を持っているのだから。この民族的精神は…（我々が）共有する国家が存続していた数世紀間を通じて形成されたものであり、共通の生存を求める闘争における、一体感である。そして、集団としての成功、失敗、目標へ向かう熱望において、隣接する諸外国の伝統と区別されているという感情である。この民族的精神は、歴史の長い過程を通じて形成された。この民族的精神は、歴史の中に、その存在と熱望を正当化するための根拠を見いだす。明らかに、「歴史的諸権利」というのは、中身のない題目ではないし、無意味な決まり文句でもない。そう、我々は一つの民族である。なぜなら、我々は共通の感情で結ばれており、共通の民族としての思考で結ばれているのだから…そしてポーランド人各人が、教育を十分に受けていない者であっても、ポーランド人としての意識を持つようになるという目標に、共通の意思が向けられているのだから。⁽¹⁾

ポーランド人であるか否かは、ポーランド語を話すか、出生地がポーランドであるか、といった基準によって判断されるのではなく、「民族的精神」の共有にある、と彼は述べている。具体的には、ポーランド民族がさらされている、諸民族間の生存競争に貢献するかどうかによって決まる。つまり、民族の共通の目的に貢献する感情が、ポーランド民族の構成員を定める基準となっている。⁽²⁾

では、言語や出生地といった、エスノー言語的基準は、全く重視されていないのであろうか。『一現代ポーランド人の思想』（1903年）では、各分割領におけるポーランド人の意識の相違について、次のような記述がある。

ガリツィアには、自分たちを大変優れたポーランド人だと自負する人々がいる。彼らは、ポーランドとの関係を、単に、ポーランド語を公用語とし、ポーランド人に政府の職を与えるといった、そうした狭いものとしてのみ捉えている。しかし彼らは、迫害され、最も重要な諸権利を侵害されたポーランドについて、知ろうしない。また、とくにロシア領ポーランドには、苦しむポーランドをのみ愛する人々がいる。彼らのパトリオティズムは、ポーランド民族の抑圧を導けば十分なのである。彼らは、ガリツィアにいる同胞を、ほとんど嫌っていると言ってもよく、その理由は、〔ガリツィアのポーランド人たちが〕抑圧されていないからである…。⁽³⁾

ここでドモフスキは、ガリツィアを拠点とし「有機的労働」を唱導する知識人や文化人たちを批判しつつ、同時に、ロシア領ポーランドの武装蜂起の伝統に固執するパトリオティズムを皮肉っている。ガリツィアの知識人たちは、政治的には無関心を決め込み、高邁な文学に耽り文化的発展にいそしんでいる。それは、他の分割領にいるポーランド人や、統一されるべきポーランド全体の運命から目をそむけ、政治活動を理由に迫害される危険を回避する、無責任な態度である、という批判である。他方で、ポーランド民族独立のためという大義名分を掲げながらも、現実的には敗北に終わることが自明な武装蜂起を繰り返そうとする、熱狂的なパトリオティズムの唱道者らに対して、ドモフスキは冷笑的ともいえる見方をし、彼らは意図的にポーランドを困難な状況におこうとし、その状態で抵抗を続けることに価値を認める人々であると断じて距離を置いている。彼らは、祖国の分割という悲劇的運命や、自己目的化した武装蜂起への執着に自己愛を感じ、そこに自己満足がまぎれ込んでいることを、ドモフスキは感じ取っていたのではなかろうか。「悲しみには、いくぶんか快楽がまじっている」といったメトロドス、あるいは、「泣くことには、ある種の快感がある」といったオウィディウスの指摘のように、⁽⁴⁾ 純粋な悲嘆というものは存在し得ない。どのような悲嘆の中にも、必ず一抹の快楽が混ざっている。

確かに武装蜂起は、ポーランド独立と抑圧者の打倒という大義を掲げてはいたが、それは実現不可能な計画であった。にもかかわらず、蜂起主義者たちは、それを試み、敗北し、抑圧されながらも、繰り返そうとする。その理由としては、先にあげた大義もさることながら、とりわけシュラフタにとっては、蜂起を行い祖国のために犠牲を払うことが自己陶醉の手段となっている側面があったことも否めない。そういった文脈において、ドモフスキは、それが結果に対する責任を負ったポーランド民族のためのパトスではないことを、文中の表現を用いて説き明かしたのであろう。

ドモフスキの思想においては、ポーランド民族は「共通の意思」に基づくものとされ、目的を共有するものとされた。民族的精神を共有する者は、民族全体の利害を現実的に考え行動することが求められた。

しかし、現実には、ポーランド人となるべき人々ととりわけ農民は、ポーランド民族としてのアイデンティティを意識していないという事実を、彼は認識していた。ドモフスキが理想とする、共通の意思で結ばれる共同体と、現実世界の「まだ啓蒙されていない」農民の間には、大きなギャップがあった。この問題について、彼は、いまだポーランド人としての意識を持たない農民たちは、潜在的ポーランド人なのであり、民族意識の啓蒙を通じて独立運動の主体へと成長するという説明をしている。⁽⁵⁾これは、潜在的ポーランド人という概念を用いることによって、民族としての意識が実際に広く普及する前段階においても、ポーランド民族の存在を確保するための構想であった。⁽⁶⁾

第三節 リアリストの04年革命

思いがけずロシアの衰退をもたらした日露戦争の展開は、ロシア帝国支配下において独立運動にかかわる人々の思考に、強い影響を与えずにはいなかった。ドモフスキもまた、国際状況の変化に対して最も鋭い感覚を示した一人であったが、他方で希望的観測は厳しく退けられ、その冷静な思考を失うことはなかった。

極東での緊張の高まりと日露戦争勃発およびその進展した時期において、彼の政治的リアリズムは初めて明瞭に発揮された。圧倒的な力を持つとされたロシア帝国が内外で危機におそわれるなか、二十世紀初期のリアリストの目に映じた国際情勢、とりわけポーランドをとりまく情勢はいかなるものであったら

うか。

以下では、「日露戦争に対して」と題され、1904年6月に発表されたドモフスキの論説から、彼が状況の本質をいかなるものとして認識していたのか、また、そこに表出する彼の思想的特徴をみてみよう。⁽¹⁾

戦争の勃発したその瞬間から、我々は皆無意識のうちに、太平洋上の何処か、満州や朝鮮といったエキゾチックな国々で最近起こったこの戦いが、我々民族の運命に重大な影響を及ぼさずにはいないことを、理解するというよりは感じていたのであった。とはいえ、漠然と現局面の重大性を認識するのみにとどまっているわけにはいかない。政治的な思考を働かせる必要がある。この戦争に何を期待すべきかを理解するためだけでなく、有害な幻想や、荒唐無稽な空想の誘惑に負けてしまわないために。⁽²⁾

ワルシャワから遠く、シベリアを越えた東の果てで起った戦争は、しかし、その地理的隔絶にもかかわらず、ロシア領ポーランドの政治活動家たちにとって極めて重大な意味を持っていた。緒戦で日本に敗北した専制権力の権威が弱まると、とりわけ左派の間では、この戦争に日本が勝利すれば、ロシアで革命が起るかもしれないという期待が高まった。ピウスツキらポーランド社会党は、日本との協力による武装蜂起をも視野にいれ、ロシア帝政を打倒する計画を現実に関し始めていた。この論説より約5ヶ月早い1904年1月には、既に同党のピウスツキやヴィトルド・ヨットコ-ナルキューヴィチ（Witold Jodko-Narkiewicz, 1864-1924）らが、日本在外公使館に対して、日本軍内におけるポーランド人部隊の組織や、ロシア軍に徴用されたポーランド人兵士を動員しての工作について、提案することを決定していた。⁽³⁾

しかし、ロシア領ポーランドにおける武装蜂起と日本軍の攻撃との挟み撃ちによって、ロシア軍およびロシア政府に打撃を与えるという考えは、たんにロシアが極東での戦争によって損害を受けているさ中であるという国際状況の変化を除けば、敗北と弾圧に終わった一月蜂起（1893-4年）のそれと本質的に同じであるとドモフスキは見ていた。緒戦においてロシア政府が打撃を受けるや否や、「一年前にはロシアを揺るぎなき大国とみなしていた人々の多くが、…ロシアを侮りはじめて」おり、またも武装蜂起という「積年の悪癖を持ち出そう

とし、それによる独立という非現実的な悲願に流れかけている。それが彼の危惧であり、また警告を含む批判を發する所以であった。⁽⁴⁾

他方で、一月蜂起の失敗後、ロシア領ポーランドにおいては、もはや反政府的な政治活動にかかわろうとしない「服従派」が優勢であった。「服従派」の人々は、もしロシアが日本に敗北すれば、ロシア政府は、内政において臣民に対して厳しい政策を維持することができなくなり、妥協策を示してくるであろう、と期待していた。それが実現するならば、何も、危険を冒して政府に反対する必要はない。自ら武装蜂起で血を流したり、非合法の抵抗運動に身を投じたりせずとも、日露戦争の終結を待つてさえいれば、偶然の恩恵に与れるのではないかと、彼らが考えたとしても不思議はなかった。

こうした、「手に入れるべく苦勞したり争ったりせずとも、熟した果実のように、ひとりでに歴史の樹から落ちてくる」果報を待つのみをの姿勢を正当化することに對して、ドモフスキは「民族のエネルギー」という観点から、再考を促している。もし、彼らのいうように、ロシア政府の自発的な軟化に期待し、半ば眠った状態でい続けるなら、一つの生命体の姿に類推されるポーランド民族は、全体の活力を弱めるであろう。さらに、内政的变化に対する期待の高まりにもかかわらず、戦争の後に何も変わらなかったらどうなるのか。一月蜂起が見せた独立という夢が幻滅に終わったとき、人々が無気力にとらわれたのと同様、今回もまた、内政改革という期待は破られるのではないかと。そして、その後には、精神的な傷跡として「幻滅」や「自信の喪失」が残されるだけではないかと、と問う。彼にとって、戦争勃發からこれまでに示された、これらのポーランド社会の反応は、一月蜂起の敗北をもたらした極端な武装蜂起ないし行動主義への信賴や、また一月蜂起後の「服従派」が示した政治活動に対する徹底した無気力さという、両極の延長であった。⁽⁵⁾

では、ドモフスキ自身は、どのような方策をとろうとしていたのであろうか。

ロシア国家は、対外的な力や国内での権力を失えば、臣民に対する〔専制的な〕姿勢の維持に不安を抱かざるを得なくなり、アジアで困難に直面すればするほど、我々を根絶するための戦いを遂行する力を弱めるであろう。他方、我々は、ロシア国家からの攻撃を撃退し、民族の生存のために必要なものを手に入れることができるようになるであろう。⁽⁶⁾

ここでの彼の国際情勢分析は、ほぼ上述の「服従派」のものと重なっている。ただし、大きく異なっているのは、座して望ましい変化を待つのではなく、これをロシア国家から受けてきた抑圧を退ける時期と捉え、これを機にポーランド民族の存続に必要な政治的条件を整えようという、危機的状況をチャンスに変えようとする視点である。

また、国民民主党、およびその地下組織である民族連盟は、「戦争が始まったときから、」ロシアの国内状況が法改正等によって変化するにせよ、それによって対ポーランド政策が大きく変わるといった過大な期待は持たず、「ロシアの国内状況の法的な変化を拠り所とする期待や希望に左右されない」と宣言していた。かりにロシア政府が内政に若干の変化を加えても、それだけでは、自分たちの望むような、ポーランド民族の生存維持には不十分である、という認識があった。「服従派」にはそれが理解できていない、と彼は考えていたのであろう。⁽⁷⁾

ロシア政府は「戦争の後に何を「与える」だろう、憲法だろうか、それとも別のもっと小規模な改革であろうか、あるいは引き続き現行の制度を維持して、期待を全て欺くのだろうか」と問う「服従派」の思考様式は、一月蜂起後40年間かけて培われた、政治的な受動性の表れであった。それは、自己の運命に対する無力さの現れであり、「常に政府に積極的な役割を認めて」しまうことになる、とドモフスキは批判する。⁽⁸⁾

ただし、うち続く敗戦の結果、ロシア政府が国際社会および国内において権威を失う、という展望については、「これは、多少は当たりそうな憶測などというものではない。紛れもない事実なのだ」として同意を示している。ただし、「ただ一つの事実から、それに見合わないほど拡張した結論を引き出すのは大きな誤りであろう」とし楽観を避けている。

ロシア政府の衰弱という「事実」を認識しつつも、そこから有利な状況を過大に評価するのをドモフスキは慎重に回避した。国民民主党やポーランド社会党など、ポーランド人の政治活動家集団にとって、「政府の威厳の衰えや財政危機」という支配者の苦境は、「並外れて好都合な状況」に他ならなかった。しかし、諸集団がばらばらの行動や計画をとっているのは、政府にとって十分な対抗者となることはできない。いくら弱まったとはいえ、「相対的に見れば政府の力は、なお十分に大きいことが明らかになるであろう」。帝国と、国家なき民族のなかの更に一部活動家の少数集団とでは、全く規模が違っており、いわんや

武力に訴えるのだとすれば、その力の差は歴然としていた。⁽⁹⁾

そして彼は、ロシア政府を構成する官僚集団に着目している。たとえ戦争の結果がどうであれ、「高級官僚たちが、国家の体に新たな生命を吹き込むという目的のためだけに、その巨大な権力を自ら断念するなどとは」考えられず、彼らが政府の巨大な権力を保持することに変化はない、と彼は予測していた。

さらに、政府は警察権力全般を強化し、また、盛んかつ精力的な活動を拡大した。ロシアの反対派の機関紙の機知に富んだ指摘によると、いまや、外政における敵より内政における敵との戦いに手練れたプレーヴェの方が、クロパトキンよりも生き活きしているのだという。⁽¹⁰⁾

開戦に当たっては、外交上の要因もさることながら、国内政治における対立が作用していた。すでに、1903年8月14日にウィッテが解任され、9月には、皇帝を議長とし、プレーヴェを副議長とする極東委員会が設置された。10月には、冒険主義的な構想を唱えるウィッテの政敵、ベズブラーゾフがそのメンバーとなった。

プレーヴェは、「革命をおさえるには、小さな勝利に終わる戦争がわれわれには必要だ」と述べたといわれている。しかし、それはクロパトキンから聞いたウィッテが書き留めたもので、その背後には、プレーヴェに戦争責任を負わせようという意図があったとされる。プレーヴェが冒険主義的なベズブラーゾフに近づいたのは、ウィッテを追い落とすためであったとされる。⁽¹¹⁾

しかし、国内政治において活発な戦いぶりを見せていたプレーヴェは、この論説から一ヶ月とたたない1904年7月28日、ペテルブルクにおいて、エスエル党戦闘員サザーノフにより暗殺される。日露戦争は、ロシア社会からの人気は極めて低い戦争であった。⁽¹²⁾ロシア国内の反政府政治活動家は、戦争批判を強めており、この死は広く歓迎された。⁽¹³⁾

プレーヴェの死後、新内相としてピョートル・スヴァトポルク-ミルスキー公爵が任命され、改革政策の承認をツァーからとりつけて、「自由主義者の春」とよばれる時期が到来する。そうした展望は、この論説が書かれた時点のロシアの状況からでも、ある程度予想が可能だったのであろう。

しかし、戦後に政府主導の改革が行われるにしても、それは表面的な緩和策

に過ぎず、ロシア社会と政府ないし官僚集団との関係が根本的に改められることはない、とドモフスキは分析している。

ツァーリ政権は戦争の結果が不首尾に終わった場合、臣民に対して自ら妥協政策をとり始め、正当かつ極めて穏健な彼らの要求に耳を傾けるようになる、と判断する権限は何もない。…政府は、臣民を催眠にかけるために、絶大な力を有する毅然とした大国という役割を演じたがっている。⁽¹⁴⁾

「中枢まで道徳的に頹廃したモスクワの官僚集団」は、敗戦のショックで一時的に失墜した国家の権威が回復すれば、再び専制を強めるであろう。そこで、反政府政治活動をおこなうグループがとるべき行動は、当然そうした政府の真意を見抜き、それに抵抗することである、と彼は主張する。そして、それだけに満足せず、この状況を利用して政府の姿勢を根本的に変えさせることが必要である、と訴える。

実際、政府が戦争から極めて衰弱した状態で撤退することは明らかである。他方、我々を含め、政府と戦っているあらゆる集団にとって、任務遂行は極めて容易になった。なぜなら、政府の絶対的な力という堅固な壁に、対外的な敗北が、勝手にかなりの割れ目を入れてくれたのだから。我々の活動や民族的戦いの土壌は、並外れて肥沃になるであろう。しかし、最大限強調しておくが、戦後に我々を待っているのは、刈り入れではなく、政府の雑草を引き抜き、自前の耕地を開墾するという、困難かつ精力的な仕事である。つい最近まで、ロシア政府の権力に対抗するのはシシュフォスの苦役である、と多くの人が考えていた。彼らは、ロシアの建造物の壁をじっと見つめ、こう考えた。

一つ一つの煉瓦はしっかりとめられているだろうが、

そして彼らは絶望とともに肩を落とした

あたかもこう考えているかのように：誰もこれらの壁を倒すことはない！と⁽¹⁵⁾

ロシア政府の衰退という事実を過大評価してはいけないと警告したドモフス

キだったが、政治的変革を起こしうる絶好の機会が到来しつつあることは、確信していた。日露戦争の敗北は、決して倒すことができないはずだった権力の壁に、ロシア政府が自ら打ち込んだ楔であり、そこにできた小さからぬ隙は、独立運動の突破口となるかもしれなかった。社会主義者たちは、ひびの入った壁を、自分たちの武装蜂起によって完全に打ち崩せると信じていた。他方、服従派の人々は、入ったひびからいくばくかの恩恵がこぼれてくることを期待し、壁の下にたたずんでいた。これに対して、ドモフスキは、僅かずつでもそのひびを広げ、対ポーランド政策を民主化させ、自治を与えさせる道筋を着実につけていこうとしていた。

彼は、さらに、ポーランド民族の内部にある様々な政治活動グループの「輪を最大限に広げて」、統一的な運動を形成しようと訴えている。おそらく念頭にあったのは、ポーランド社会党を中心とする左派諸集団であろう。これより約一ヶ月後に、日本政府への対応をめぐる、彼とピウスツキらポーランド社会党のメンバーとは激しく対立する。それを見越してか、ドモフスキが政党間での意見統一を図っていた様子がうかがわれ興味深い。⁽¹⁶⁾

政府が提案してくる改革が、表面的なものにとどまるのだとすれば、それに代わる案として、ポーランド人の側から積極的に要求を示していくというのが、彼の採ろうとしていた交渉戦術であった。しかも、それらの要求は、ポーランド民族の生存にとって不可欠なものの要求であると同時に、政府にとっても理解可能なものでなくてはならなかった。⁽¹⁷⁾ ここで、打倒すべき敵としてではなく、交渉すべき敵対者としてロシア政府を描いている点で、彼の立場は社会主義諸派と異なっている。彼我の相対的な力関係を過信なくとらえるなら、それはむしろ当然の見方であった。

それぞれは小さな勢力にすぎないポーランド人政治活動家の集団が、ロシア帝国と交渉しうるまでの立場を獲得するには、諸政党間が一致しなくてはならない。それに加え、「こうした作戦が効果的であるためには、無条件に大衆的なものでなくてはならない…我々は先に立って、人民を貧困から連れ出し、啓蒙し、組織しなければならない」として、大衆の支持を得る必要性をドモフスキは強調している。⁽¹⁸⁾

たんに大衆を動員するだけでなく、ロシア政府との戦いの意味を、彼ら自身の問題として感じ取らせ、理解させる必要がある、と彼は主張する。農村労働者、工場労働者を問わず、「民族的運動」への自覚を促すことは、大衆をポーラ

ンド民族の一員へと、将来の国民へと啓蒙するプロセスにはかならなかった。

この論説の結びにおいて、彼は、「我々を待つのは、静寂や安全な避難所ではなく、戦いと任務である」、「だからこそ、現在、自分たちの力を、諸政党の狭量かつ取るに足りない規模の取り組みへと分散させてしまわず…共通の大規模な任務に力を注ぎ込むことこそが」諸政党の義務であるとして、ポーランド民族としての団結と統一を訴えている。⁽¹⁹⁾

ロシア帝政の揺らぎが現実のものとなりつつあった状況で、日本と協力しての武装蜂起を計画する左派の積極的行動主義者たちも、またロシア政府の自発的な内政改革が民主的なロシア国家をもたらすと期待する「服従派」たちも、それぞれの幻想にとらえられていた。そうした一種の高揚感が広まる中において、ドモフスキの示した情勢分析と提案は、民族の統一という、やはり一つの理想を説きつつも、なお冷徹な政治的リアリズムに根拠付けられていたといえてよいであろう。

第五章 未成立国家の外交構想

——『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』を中心に——

ドモフスキは、十九世紀末から、ポーランド独立を極めて現実的な課題と捉えていた。すでに1895-1897年頃、彼はデンビツキとの間で、次のような対話を残している。

「あなたはポーランドの独立を心から望んでいますか？」こうドモフスキが問うと、

「勿論、望んでいます。」——デンビツキは答えた。

「では、あなたは何になりたいですか？」

「何になる、とは？」

「だから、独立したポーランドで、どういう役割を果たしたいですか？」

こうした問いは、「そんなこと一度も考えたことがなかった」デンビツキを、ひどく驚かせた。困惑するデンビツキに対して、ドモフスキは続けて言った。

「私だったら、一番望ましいのは、ワルシャワの警視總監になることですね。」

「??」

「10年間で、ヨーロッパ式の生活を人々に教えるのです。清潔で整然とした町、ポーランドの首都に相応しい町にしましょう。モスカレは、ワルシャワを『植民地の首都』にしてしまった。だから、出来るだけ速やかに、連中の痕跡をワルシャワから拭い去らねばならないのです。さあ、あなただったらどうしますか?」

再度問われて、デンビツキは、沈黙してしまった。それに対して、ドモフスキはこう反応したという。

「ああ！あなたたちは皆同じだ。感情では独立を切に望みながら、それに対する準備が全くできていない。独立ポーランドには、大臣や政治官僚、警察署長、外交官等々が必要になるということ、あなたたちのうち誰も考えていない。外国から専門家を連れてくるわけでもないでしょうに。あらゆる場合に備えて、私たちの世代のうちに、これらの任務の準備をしておかねばならないのです。」

これを聞いたデンビツキは、自分の目の前に「新しい地平」が展開したかのように感じたという。確かに、「その日がいつか来る」とは思っていたものの、自分も友人たちも、ドモフスキが指摘した現実としての独立について、全く考えていなかったことに気づかされた、と回想している。⁽¹⁾

またドモフスキは、後年、『ポーランド政治と国家の再建』（1925年）において次のようなエピソードを記している。すなわち、『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』が発表された際、信望厚いクラクフの教授の一人は、「ドモフスキ氏は、自分がペテルブルクのポーランド・サークルの代表であることを忘れ、ポーランド外相になったつもりでいる」と述べたという。⁽²⁾これはおそらく、三面忠誠主義の立場からなされた批判であろう。その視点からは、ポーランド・サークルの代表は、ロシア領ポーランドに暮らすポーランド人の利益代表たるべきであるにもかかわらず、あたかも独立が可能であるかのように、将来のポーランド国家の外交構想を不遜にも論じていることへの批判であった。

ドモフスキは、こうした批判に対して、「もし、それが〔ポーランド・サークルの代表であるという立場の〕失念であったとすれば、既に1907年に、私はそうした失念をしつつ、ドゥーマに臨んでいたことになる。ポーランド・サークル代表者の主要な任務は、〔公式には未だ〕存在していないポーランド外務大臣の義務を果たすことである、と私は思っていた。そして、ポーランド再建を可能性としてだけでなく、不可避的なものであり、しかもそう遠い日のことではないと確信している人間にとって、それ以外の見方などあり得なかった。」と応じている。⁽³⁾

もし仮に、ドモフスキが一連の外交論を、これは未だ成立していないポーランド国家にとっての外交論だったのであるが、すでに1907年に書き上げていたという事実がなければ、⁽⁴⁾こうした回想は、自らの予見の正確さが歴史によって証明されたことを、いわば「後知恵」として強調したものと解されてしまうかもしれない。しかし彼は、『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』において、国際情勢への鋭い洞察力を示し、それに基づいて考え抜かれたポーランド政治を論じている。そして、1900年代のポーランド問題の国際外交的な状況認識に基づき、一貫した理性的判断にしたがって構想し、行動しようとしていたことを、読み取ることができる。⁽⁵⁾

第一節 誰を敵とするのか

ドモフスキの著述において、ロシアとドイツという二大国にどう対応するか、という点が盛んに論じられるようになったのは、プログラム変更へと向かう1890年代後半から1900年代初頭のことであった。

例えば、彼が編集を行っていた『全ポーランド評論』紙上では、1903年に「ドイツと共にロシアに対抗するのか、それともロシアと共にドイツに対抗するのか」という友敵選択の解決が議論されている。⁽¹⁾

「ドイツと共に」或いは「ロシアと共に」という以外に答えは無く、これら以外に第三の選択肢は無い。なぜなら、ポーランドにとって最も正当な答えのひとつは、「ドイツにもロシアにも頼らずに、むしろ独力で両者に対抗する」というものだが、これは、しかし、ある場合において、前者あるいは後者に連合を申し入れる必要性を排除しないか

らである。⁽²⁾

いわば、ドイツあるいはロシアと連合することが二者択一的に検討されていたのであった。これは、事実上、どちらかの国家機構に取り込まれた上で、ポーランドとして一定の自治あるいは自立を維持しようという考えであった。当然、どちらにも取り込まれることなく、ポーランドが自力で独立国家となる可能性も言及されてはいる。しかし、その際にも、「連合」という形でどちらか一国の力を借りなければ、国家として成立することは困難であろうという苦汁に満ちた予想が示されている。そうした理性的な認識と、それでもなお独立を目指したいという願望とが、「ジレンマ」を生んでいた。つまり、ポーランドを政治単位として独立させようとする志向と、「連合」という名のもとで従属を不可避とする認識との矛盾である。

したがって、この時期にドモフスキがロシアやドイツとの関係を論じた狙いは、将来ポーランドが独立した（あるいはその途上で自治を得た）場合に抱える対外的「ジレンマ」への対処を論じ、ひいては彼独自の外交構想を示すことにあった。それが最も顕著に示されているのが、『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』（1908年）である。

既に第二章において詳しく論じたように、1893年の『我々のパトリオティズム』において、ロシア人はポーランド社会の内に入り込み、ロシア化を押し進める敵として認識されていた。そして、ロシアを、ポーランド民族という生物体の肉体を傷つけ抑圧する、いまそこにある野蛮な暴力として、具体的な事例を列挙し、その非道さを描いていた。その際、ドモフスキが武装蜂起を批判した理由の一つは、その非現実性にあった。ロシアの力は強大であり、蜂起を鎮圧するのに十分な軍事を備え、ポーランド内に駐留しているのだから、蜂起は独立という目的に適切な手段ではない、というのである。そして、ドモフスキは社会的ダーウィニズムに則り、民族同士の生存競争という構図でポーランドの置かれた状況を捉え、ロシア人の暴力性を恐れつつも、文化面や経済面ではポーランドの方が上だと考え、ロシア人を蔑視していた。⁽³⁾

これに対し、1903年時点でのドモフスキのロシア観では、粗野な暴力を具現するとしての非文化的なロシア人に対する、単なる嫌悪や忌諱感だけでなく、政治空間としてのロシア帝国の現状を見極めようとする視点が、明確にされている。⁽⁴⁾ 1890年代のドモフスキの著作と比べれば、ロシアの中のポーランド、と

いう視点から、ドイツとロシアに挟まれたポーランド、という視野への拡大があり、1908年の代表作である『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』の、基本的枠組みの形成とみることができる。

次に、彼のドイツ観をみると、ドモフスキは、文明化されていないという点でロシアを蔑視する一方、ドイツに対しては、その文化的優位を認めており、ポーランドの民族性を同化しうる手強い民族として畏怖し警戒しつつ、敬意を払っていたことがわかる。こうした民族的文化的な優劣評価に反して、政治活動領域としてのロシア領ポーランドを、彼は重視していた。ポーランド人を同化しえないロシア人の支配下の方が、優れたドイツ人の支配下よりも、民族としての自立を獲得しやすと考えたためであった。彼は、ロシアという防壁の中で、プロイセンを中心とするドイツの経済的ひいては文化的また軍事的拡大に備えようとする考えを持っていた。

また、1903年7月の小論「ドイツとロシアに対する我々の立場」においては、ロシアあるいはドイツを根拠なく嫌悪することが非難され、また、「ドイツの危険は明らかに、我々が概して思っているよりも大きく、それに直面した不安ゆえにロシアの抱擁に飛び込みたいと思う人々の多くが考えているよりも、なお一層大きい」としてドイツがもたらす危険に対する認識の低さに警告が発せられている。さらに、ドイツの側からは、ドイツ人が「ポーランドの民族性の成長を嘆く声」や、ポーランドの「政治—民族運動の発展を嘆く声」が聞こえてくる、と指摘する。⁽⁵⁾

そして、むしろ脅威として広く認識されているロシアのほうが、対応が易しいと論じられる。その理由を、「たとえ王国を失ったとしても——ただ王国だけに限っていえば——〔ロシアは〕その根本から揺り動かされはしないだろうし、むしろより正常な国境を獲得するかもしれないのだから」と説明している。また、彼は、「ロシアはプロイセンよりも、…迅速にある種の妥協がポーランド人との間に生まれるのを望んでいる」と確信していた。⁽⁶⁾

ドモフスキがこのように述べた根拠は、極東での緊張の高まりにあった。この小論より半年早い1903年1月の時点で、ドモフスキはミウコフスキに宛てて、ロシアは表面的にしか力が無いにもかかわらず、国際的な危機つまり日本との戦争へと急速に向かっている、と書き送っている。⁽⁷⁾「プロイセンにとって…目下最重要の課題は、…ポーゼンとオストプロイセンをドイツ化することにある」⁽⁸⁾とし、ポーランドにとって脅威なのは、極東に足をすくわれているロシア

帝国ではなく、むしろドイツだと強調している。

ポーゼンにおいては、1901年、ポーランド人生徒による大規模な学校ストライキが開始されていた。また、反ポーランド主義的な「ハカティスト」⁽⁹⁾を中心に、ポーランド人の土地取得に対抗することを目的とした、ドイツ人による東方植民活動が行われていた。これは、反面、ドイツとしても、東部プロイセンの「ポーランド化」に対して大きな危機感を抱き、断固としてそれを阻止しなければならないという見解が存在していたことを示唆している。例えば、この時期に活躍した自由主義者、ドイツ・ナショナリストとして知られる牧師フリードリヒ・ナウマンは、ポーランド問題について積極的に発言していた一人である。彼は、1898年帝国議会選挙に際し、選挙演説でポーランド人の流入の脅威を盛んに説いた。その主目的は、選挙戦における保守派のユンカー攻撃にあったが、同時に、ポーランド人の排撃をも意図していた。⁽¹⁰⁾

こうしたドイツ世論の動向に対し、ドモフスキとしても、警戒の対象をロシアからドイツへと移した。彼は、ロシアは目下極東の危機に集中しており、ポーランドにとって差し迫った危険性を持つ存在ではなくなっていた。ドイツに比べれば、ロシアは、ポーランド人の同化よりもずっと重要な課題を、数多く抱えている。とくにこの時期、ロシアの国家的課題はアジアに集中していた。その結果として、「極東やペルシャ湾へ向けてのイギリスとの競争の領域で、非常に困難な状況が生じるのは、全くもってありうること」であり、「ロシアは、ポーランド人に対して何らかの利権を与えることで、西方で自身の安全を得ることが最重要事だと認識している」のではないかとドモフスキは見ている。⁽¹¹⁾

ミウコフスキへの書簡で示された見解と同様、外政上の危機に起因するロシア内政の危機に際して、何らかの民主的变化がポーランドにもたらされることを、ドモフスキは期待していた。ただし、ドモフスキは、ポーランド問題が国際化することは確信しつつも、それが何ら国境線の変更をもたらさないと考えていた。しかし、同時に、「我々には強い民族的要求があるということを、彼らの分割政策との戦いにおいて彼らに強く感じさせなくてはならない。そうすれば、モスカル〔ロシア人の蔑称〕も、漸くそれを理解するだろう」として、ポーランド民族としての要求を、ロシア政府に対して積極的に押し出す必要があると説いている。

誰も弱い者たちの友情を勝ち取ろうとはしない、なぜなら誰も彼ら

を必要としていないからだ。もし我々が、[ポーランドを三分する] 国境線にもかかわらず、緊密な民族的統一をもって強者となるなら、…日々の活動を通じて、… [統一された] ポーランドを建設するなら、そのとき敵はおのずと、我々に対し、より配慮することになるだろう。そうなれば、ロシアは、我々の歓心を得るために努力さえしなくてはならないかもしれない。⁽¹²⁾

1904年末には、ロシア領ポーランドにおいてもツァーリ政府の妥協的な姿勢が政策に現れていたことを、ドモフスキは見逃さなかった。⁽¹³⁾ ドモフスキは、その思想のリアリズムゆえに、ロシアという政治活動領域内で、活動の範囲を広げようとしていたのである。

第二節 新しい帝国

前節に見た危機に直面するロシアと入れ替わるように、ドモフスキの政治認識なかで台頭したのが、ドイツという問題であった。彼は、危機に直面したロシア政治に積極的に参入するのと反比例するように、きわめて独特な形の「ドイツ脅威論」を唱えるに至る。それは、やがて、彼の著作『ドイツ、ロシア、そしてポーランド問題』(1908年)に体系的に展開されることになる。それでは、このプログラム転換の時期において、いかなる政治史的文脈から、ドモフスキは、ドイツに関する問題構成を行うにいたったのであろうか。そこで本節では、1890年代に遡り、ドモフスキのプロイセン領ポーランドの活動とドイツ認識の関連を再検討することとしたい。

ドモフスキにとって、ドイツが問題化する第一の文脈は、プロイセン領ポーランドの存在であることは、いうまでもない。彼は、政治活動を開始した1890年代から、ロシア領ポーランドに焦点を当て、そこに民族連盟が活動を行う拠点を置いていたことは、先述の通りである。しかし、三つの分割領全てを統合するという彼の「全ポーランド主義」の主張からすれば、ロシア帝国から分離独立するだけでなく、プロイセン領、オーストリア領という他のポーランドにおいても、現地のポーランド人と連携し、ドイツ帝国、そしてオーストリア帝国からも分離独立し、さらにその全体を統合する政治活動を展開する必要があった。それでは、プロイセン領ポーランドにおける彼の運動はどのように展

開されたのか。

既述のように、1893年、ドモフスキはポプワフスキやバリツキと協力して、「クーデター」を起こした。それは、スイスを拠点とした政治組織であるポーランド連盟を、ワルシャワを拠点とする民族連盟へと改変させる、というものであった。この際、民族連盟は、三分割領全体および亡命先における政治活動の統一を決定した。しかし実際は、「クーデター」と呼ばれるものの、ポーランド連盟側からの抵抗の恐れもなかった。なぜなら、ロシア領ポーランドを除く地域には、ポーランド連盟の組織は事実上存在していなかったためである。プロイセン領ポーランドには、もともと何の組織も設立されていなかったし、ガリツィアに置かれていた「委員会」は、結局何もせず辞表を出し、解散した。また、亡命者の拠点として、スイスに中央本部が置かれていたが、全く形式上のみの存在であった。⁽¹⁾従って、三分割領全域を網羅する政治活動を掲げた民族連盟は、プロイセン領ポーランドにおいては、ゼロからのスタートを余儀なくされたのである。

1896年秋、ドモフスキとポプワフスキはポズナンを訪れた。⁽²⁾旅の目的は、プロイセン領ポーランドに、組織設立の端緒を開くことにあった。しかし結果的に、プロイセン領ポーランドは、まだ若い世代の活動家が成長を待つ段階にあったため、さしあたり数人の活動家とのみ接触するにとどまった。このときドモフスキらが出会ったのは、ヴワディスワフ・ラプスキ (Władysław Rabski) や、ベルナルド・フシャノフスキ (Bernard Chrzanowski)、ボレスワフ・クリシェヴィチ (Bolesław Krysiwicz) といった、当時『ポズナン評論』 *Przegląd Poznański* の出版にあたっていた人々であった。⁽³⁾

この『ポズナン評論』は、大学教育を受けた若者たちが、リベラルな考えを持つシュラフタと協力して、1894-96年頃に出版を始めた雑誌であった。同誌は、プロイセン領ポーランドの三面忠誠主義者が主張してきた、ベルリンでの議会活動を志向する戦略が破綻したことを宣言しつつ、上流階級が庶民の間で民族主義を宣伝するよう訴えた。こうした彼らの主張の背景には、プロイセンによる対ポーランド政策の抑圧的傾向等があったものと考えられる。『ポズナン評論』がドモフスキの『全ポーランド評論』にどこまで賛同したかは不明だが、その思想的立場は、極めて近かった。『ポズナン評論』は、こうした活動を行ううへで、シマンスキ (Szymański) らポピュリストとの協力関係を築いていった。

こうして、ある程度独自に成長した『ポズナン評論』が、ロシア領ポーランドを中心とする民族連盟と、本格的に協働を始めたのは、1899-1901年頃であった。この時期に初めて、民族連盟はプロイセン領ポーランドからメンバーを迎えている。以降の数年間に、その人数は徐々に増加し、ポズナニア、西プロイセン、上シレジアにおいて、国民民主党の組織的地盤を固めていった。ポズナンは、新しい運動の拠点となった。

1900年代に入ると、プロイセン領ポーランドにおける政治状況は、より大衆政治が大きな比重を占めるようになった。当初、ポズナンの国民民主党は、少数の高学歴な若い活動家のみで構成されていた。彼らの政治的な刺激によって、ポーランド人の商業者や職工、都市労働者は、しばしば露骨な外国人嫌いや反セム主義、反貴族的・反聖職者的なスローガンを使用するようになった。上流階級は、こうした運動に必ずしも同調してはいなかった。しかし、プロイセンのポーランド政策が抑圧的になり、忠誠主義が失敗し、学校ストライキが発生すると、上流階級の伝統的な政治スタイルは廃れていった。一般庶民の支持と信頼を得るために、シュラフタや聖職者は、よりラディカルで非妥協的なナショナリストの論調を取り入れ、ブルジョワや庶民との結びつきを深める必要に迫られていた。⁽⁴⁾

国民民主党が最初に公然の政治的成功を収めたのは、1901年、国民民主党指導者の一人フシャノフスキが、ドイツ国議会補欠選挙においてポズナンで議席を獲得したときであった。それを支えたのは、シマンスキラポピュリストの支援であった。続く1903年のドイツ議会選挙では、3人のポーランド人が議席を獲得した。彼等は、ポピュリストや国民民主党、「進歩的シュラフタ」の代弁者であった。これに対し、反ポピュリストの聖職者保守派は、従来の独占状態から一転、僅か5議席しか守ることができなかった。1904年までに、ポズナン国民民主党の構成員は増加し、正式な政党綱領をおくまでになった。そこでは、「全ポーランド主義」と、独立志向のエリート主義的ポピュリズムがうたわれていた。⁽⁵⁾

こうしてみると、プロイセン領ポーランドにおいて、初期の国民民主党の活動を支え、保守派に対する優位をもたらしたのは、シマンスキラポピュリストの協力であったことが分かる。国民民主党は、ポピュリストにリーダーシップとイデオロギーを提供し、ポピュリストがそれを大衆に喧伝して支持を集めるという役割分担が形成されていた。彼らは、教育を受けた有産階級の優越を認

めつつも、庶民をポーランド社会の中心となる重要な存在と位置づけ、彼らに物質的な繁栄をもたらし、民族意識に目覚めさせることを政治活動の主目的としていた。

1906年、シマンスキは国民民主党との正式な合流に同意し、⁽⁶⁾ 自己の運営する『主張者』*Oređownik* 紙を売却して、国民民主党主導の新しい新聞『日刊ポズナン』*Kurier Poznański* を創刊した。同紙の編集には、ドモフスキと親しく、プロイセン領ポーランドにおける国民民主党の主要イデオロギストであったマリアン・セイダ (Marian Seyda) が当たった。『日刊ポズナン』が、高学歴の中・上流階級に向けて、国民民主党の公式見解を伝える一方、『主張者』やポピュリストが運営するローカル紙は、大衆向けに、国民民主党の見解を平易な庶民の語風で噛み砕いて伝えた。

ドモフスキは、第一次大戦以前に少なくとも3回、プロイセン領ポーランドを訪れている。1896年に最初の訪問があり、その後1899年にベルリンに3日間滞在した。また、1913年、やはりベルリンで民族連盟の総会に出席している。⁽⁷⁾ ただし、『全ポーランド評論』紙上では、継続的にプロイセン領ポーランドの状況が報告されていた。そこから判断すると、プロイセン領ポーランドについては、ドモフスキはやや距離を置いた立場におり、彼以外の国民民主の指導者が活動を分担していたと考えられる。とすると『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』に結晶するドイツ認識は、プロイセン領ポーランドの問題を実地に考察した中から生まれたのではないことが理解できる。

それではドモフスキのもう一つの文脈であるヨーロッパ国際関係のなかで、ドイツはどのように認識されていたのだろうか。

日露戦争開戦の直前、1904年7月に、ドモフスキはロシア内の状況について、「ロシアでは外来のドイツ人出身の支配層が純粋ロシア人分子」と戦っている、という説を論じていた。⁽⁸⁾ ポーランド社会党幹部で、ピウスツキの腹心であるフリボーヴィチは、これをドモフスキの数多い「際摩ノ的」言説のひとつとみなし、ドモフスキの事実認識に疑問をなげかけていた。しかし、ここで注目すべきは、ドモフスキの言説が事実認識として正確か否かという問題よりも、ドモフスキがロシアの内政を考える際の変数としてロシア・ドイツ間の関係におけるドイツの脅威を考慮し、状況判断していた、という点であろう。戦争勃発がロシア内政にもたらす危機を、ドモフスキは予測していた。⁽⁹⁾ ドモフスキの言説においては、そうしたロシアの内政的危機をより深刻にする一因として、

国際関係におけるドイツの危険性が繰り返し強調されていた。

「東ヨーロッパの状況」論文においても、やはりロシア内政へのドイツの浸透が描かれている。それが執筆された1907年には、既にロシアの弱体化は現実のものとなっていた。したがって、ドモフスキは、ドイツとロシアの関係を見直しつつ、ドイツの脅威を強調する自説を確認していたのだといえる。

ドモフスキは、ドイツとロシアの関係について、ロシアがドイツの「平和的征服領域」⁽¹⁰⁾となっており、ロシアはドイツによって急速に侵されつつあると論じている。しかもドモフスキは、ドイツの浸透を多面的に進んでいるものとして捉えていた。そのため、ロシアの外交指導者とベルリンのドイツ政府指導者、ロシア人民とドイツの自由主義者、といった関係が挙げられており、それぞれの回路において、ドイツの影響が及んでいるのだと説明されている。⁽¹¹⁾

詳しくみると、ドモフスキは第一に、ベルリンの政府指導者たちについて説明し、彼らはロシアを経済的に支配するためなら政治的妥協も惜しまない、と断定する。⁽¹²⁾そして第二に、ゼネストやテロといった「工場における労働者の運動」がもたらす「無秩序状態」に言及している。特にロシア領ポーランドでは、そうした「運動」の資金がドイツから提供されているとドモフスキは解釈していた。そして、ドイツによる資金提供がポーランドの無秩序化を招き、ひいては産業の減退を周期的に引き起こしている、と主張した。つまり、ドイツの自由主義者の意図にかかわらず、その産業が進出することで、結果的にロシア領ポーランドの産業が損なわれている、という認識をもっていたのである。これらは一見すると、ポーランドとドイツとの関係を論じたものであるかに見えるが、実際には、ロシア認識の反映としてのドイツ認識であり、ドモフスキのロシア政治への参画を根拠付けるための国際関係認識なのであった。

そして、最も特徴的なのが、市場への流入という視点からドイツの影響力の浸透を捉えた分析である。ドイツ政府が政治的妥協も辞さないのに加えて、ロシアが自力で経済発展できないことも、ドイツの経済的影響力拡大を促進しているとドモフスキは分析していた。ロシアは天然資源に恵まれていながら、国家機構や産業関連の法の整備に欠け、経済活動の自由を保障する法的権利が発達していないことが、その根拠とされた。彼によれば、ロシアは常に、経済的により発達した隣人ドイツにとって、大きな需要のある市場となっていた。そして、ロシア市場において、「ドイツ産の輸入品は急速に増加し、今日ではもうロシアの輸入品の半分近くを占めている」。したがって、ロシアは、「将来的

にはドイツにほぼ従属するという悲惨で不利な政治状況に陥り、最後にはドイツにとって〔現在より〕ずっと都合のいい貿易条約〕を、最終的にはのみされるであろう、と予測している。⁽¹³⁾

ドモフスキは、このような経済的影響力の拡大について、今日言うところの中心一周辺という枠組みからドイツーロシア関係を認識していたといえるであろう。ローザ・ルクセンブルク (Rosa Luxemburg, 1870-1919) が『資本蓄積論』を上梓したのは1913年であった。彼はそれに先行して、ロシア領ポーランドの実態から、いわゆる「中心一周辺」構造を直観的に把握していたと考えられる。

第三節 ホーエンツォレルン国家の拡張

ドモフスキは、その外交構想において、オーストリア領ポーランド (ガリツィア) をどのように位置づけていたのであろうか。『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』第六部に収録されている、「ポーランド問題の新たな国際的役割」という論文においては、オーストリア政府のシステムの影響下にある「最も後進的な地域」であったが、19世紀後半の40年間には、ポーランド民族の活動にとって最も恵まれた条件下におかれていた」とされている。⁽¹⁾「社会的な関係は不健全で、そのため敵意が生じているにもかかわらず、経済的には貧しい状況にあるにもかかわらず、国土の東部ではルーシ問題のために常に不安があるにもかかわらず、ガリツィアはここ数十年間に、制度や法を獲得し、民族の文化的発展において明瞭に進歩をとげている」という。ルテニア人 (ウクライナ人) との対立などが東部でみられるものの、政治的・文化的な発展は評価されている。更に、「ポーランドのこの地域は、今日、国としての広範な自治や、ポーランド政治の権力、ポーランドの裁判所、二大学を備えたポーランドの教育制度を獲得しており、ポーランドの包括的に組織化された生存の唯一のかがり火であり、より高水準の文化的・民族的分野における安穏な活動の唯一のかがり火となっている…」として、政治的・文化的に、オーストリア領での活動が不可欠であることを強調している。

他方で、彼の外交構想においては、「ホーエンツォレルン国家」に隣接する、オーストリア＝ハンガリー二重帝国は、ドイツの経済帝國的な拡張を阻むかに見える存在とされている。⁽²⁾プロイセンを中心として1871年に統一された、ドイツ人の帝国「ホーエンツォレルン国家」は、やはりドイツ人の帝国であるオー

ストリアと、ドイツ世界における主導権をめぐる歴史的な争いを続けていた。オーストリアの首府ウィーンは、自らがドイツ世界の中心である、という自負を持っており、プロイセンを中心とするドイツ国家の統一と相容れなかった。また、宗教においても、オーストリアはカトリックを信仰し、他方の「ホーエンツォレルン国家」はプロテスタント信仰が主であるという違いがあった。

そうした対立の上で起こったのが、1866年の普墺戦争である。サドヴァの戦いでプロシアが大勝し、決定的に敗れたオーストリアは、ウィーンを中心とするドイツ統一を諦めることになる。しかし、その敗北以降も、オーストリアは「ホーエンツォレルン国家」に取り込まれることなく、独自の国家機構を保ってきた。そして、ロシアが弱体化したのを機会に、バルカン諸国に対して以前より大胆な経済支配を展開しつつあった。

こうしたオーストリアのバルカン経済支配は、バルカンへ経済的に進出しようとするドイツの志向と対立するかに見える。しかしドモフスキは、こうした状況について、実際にはオーストリアはドイツと対立するつもりは全くない、と考えていた。それどころか、ドイツとオーストリアは、特殊な「同盟」関係にある、というのがドモフスキの認識であった。⁽³⁾

ドモフスキによれば、オーストリアとドイツの「同盟」関係は、ロシアの脅威に対抗するために生じたものであった。しかし、日露戦争後のロシアの弱体化を待つまでもなく、何十年も前からロシアとドイツおよびオーストリアとの友好関係は続いており、「同盟」の存在意義は失われたはずである。にもかかわらず、オーストリアとドイツの「同盟」は、通常同盟以上の「何か」になっている、という点に、ドモフスキは注意を促す。そして、この「何か」が存在することによって、ドイツがオーストリアの内政にまで作用しているのだと論じる以下の引用部分では、そうした内政への浸透の指標として、二重帝国内部での、オーストリアとハンガリーの関係が分析されている。⁽⁴⁾

二つの半-君主国はドイツ語で物事を処理しており、ハンガリー人の執拗な要求にもかかわらず、ドイツ語が軍用語となっており…ドイツ〔の民族性〕は国家の中で最強の民族性である。議会が強化されたにもかかわらず、国家政治に影響を及ぼしているドイツ人層、つまり王冠の助言者を自認する人々のサークルは、より高次の軍隊や官僚のヒエラルヒーをなしており、結局、ドイツ的であることが、全ての

王朝や国家の伝統になっている。⁽⁵⁾

ここには、オーストリア＝ハンガリー二重帝国において、ドイツの「民族性」がハンガリーや他の「民族性」よりも優位にあり、そのことが「ホーエンツォレルン国家」とオーストリアとを結び付けている、という分析が示されている。過去のドイツ世界における勢力争いの記憶や、カトリックとプロテスタントという宗教上の差異は、言語や文化や経済的利害の共有によって、乗り越えられるであろう。ドモフスキにとって、オーストリアは、既にプロシアの影響下に収められた「ホーエンツォレルン国家」の一半であった。しかるに、オーストリア人は、プロシアに発するドイツ人意識の拡大に取り込まれ、オーストリア人としての意識よりも、ドイツ人としての意識を優先するようになる。また同時に、オーストリアは、列強間の抗争が激しくなる中で「ホーエンツォレルン国家」との「同盟」に向かい、ドイツの帝國的発展に共に願いを託したのである。そうしたドイツとオーストリアの共通の志向は、ポーランド人も含めたスラヴ人にとって脅威になる、とドモフスキは指摘する。そしてチェコ人を例に挙げ、彼らが勢力を伸ばして、ドイツ的なものを脅かすときにはいつも、ドイツ的な文化－民族感覚や、ドイツ人としての団結力が増大した、と論じる。

オーストリア人としての性格が非常に弱く、そのぶんプロイセン型ドイツ人の性格が非常に強いホーエンツォレルン人の国家には、スラヴ人の土地が隣接している。そのスラヴ人の土地に住むドイツの間では、全ドイツ主義的な趨勢が広がり、その趨勢は「ローマ・カトリックからの解放 *Los von Rom*」というスローガンを投げかけつつ、ほとんどホーエンツォレルンの人々に対する忠義にまで達している。その趨勢は、明らかに、独自のものとしてのオーストリアの存在を脅かしてしまっている。…オーストリア人の間でドイツ的感覚〔感情〕が弱まることはなく、プロイセン人との戦いの記憶が鮮明さを失うにつれ、それはむしろ増大した。⁽⁶⁾

オーストリアは、「ホーエンツォレルン国家」への「従属関係」に置かれ、ベルリンとヨーロッパ南東、ひいてはトルコを結ぶ、外交上の架け橋となってしまっている。従って、オーストリアのバルカン拡大は、ドイツの拡大そのもの

であった。オーストリア人のバルカンにおける活動は、「ハンガリー人としてもチェコ人としてもなく、ドイツ人として」地位を獲得することに目標を置いていたからである。⁽⁷⁾

「東ヨーロッパの状況」論文におけるドモフスキの分析は、プロイセン国家の拡大がドイツ民族的な文化や感覚を基礎にして国家形成を行うというダイナミズムを示している。だからこそ、スラヴ民族にとって「ホーエンツォレルン国家」のもたらす危険は、ロシアやオーストリア＝ハンガリー二重帝国による支配とは異質な危険であった。そして、その「ホーエンツォレルン国家」に隣接するポーランドにとっては、より一層大きな危険だったのである。

第四節 影響力の政治

『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』の第Ⅲ章「東ヨーロッパの状況 ドイツとロシア」には、1907年8月にスヴィーネミュンデで開催された会議の記述がある。また『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』第一版の序言は1908年4月19日付けである。この章が執筆されたのは、1907年8月31日、英露協商が成立した直後の時期であったと判断できる。英露協商では、ペルシャ（イラン）、アフガニスタン、チベットでの両国の勢力範囲にかんする合意が成立する。このとき、既に存在していた露仏同盟（1893年）や英仏協商（1904年）とあわせて、英仏露の三国協商が成立し、ドイツに対抗する構図が生まれることとなった。また、1907年6月に日露協商が結ばれ、日英対露仏の対立は解消されていた。そのため、極東での紛争に区切りをつけたロシアがイギリスやフランスと協力してドイツを取り囲む、という国際関係の対立構図が形成された。

ドモフスキはこの時期、ワルシャワとペテルブルクを中心に政治活動を行っていた。特に、1907年3-4月および5-6月にかけて、ドゥーマへの出席も含め、ロシア内の政治空間において活動を行うため、ペテルブルクに滞在している。⁽¹⁾そのため、この時期のドモフスキの見解には、ロシア政府が置かれていた状況が反映されていると考えられる。

ドモフスキは、国家間の軍事的権力関係とは別の次元から、「影響力 *wplywy*」という基準を用いて、東ヨーロッパの状況を示そうとした。そこで、本節においては、ドイツがもたらす危険について、特に詳細に説明されている第三部 第Ⅲ章「東ヨーロッパの状況 ドイツとロシア」⁽²⁾から、この時期のドモフスキの

ドイツ観をみていくこととする。

「東ヨーロッパの状況」論文において、まず強調されているのは、日露戦争後のロシアの弱体化である。そして、ロシアが弱まった状況について、ドイツが優位に立とうとしないはずがない、とドモフスキは予測する。しかし、その場合想定されているのは、ドイツによる武力攻撃ではない。むしろ、「一方ではロシアの対外的な影響力とロシア国外にある利益圏を奪い、他方では、ロシア自体における影響力を強化し、ある一定の〔ロシアの利益〕圏内で影響力強化を実行する」という方法のほうが、ドイツにとって多くの利益を約束するものである、という。⁽³⁾武力攻撃によってロシア領土を篡奪するよりも、ロシアの「利益圏」つまりロシアが優勢な地域に入り込み、そこでドイツの勢力を広げることこそが、ドイツの狙いであるとドモフスキは見ている。

〔日露戦争後ロシアは弱体化したが〕だからといって、戦闘的だったロシアが弱まったところについてロシアをドイツが攻撃し、ロシア領の一部を強奪する、ということではない。国際状況がそれを許す場合でさえ、〔ドイツがロシアを攻撃することは〕なさそうである。なぜなら、今日プロシア政治が抱えている自領域内のポーランド人との問題を考えると、ドイツに隣接し部分的にドイツ領に割り込んでいるポーランド地域は、戦利品として魅力的でないからだ。ポズナンのポーランド問題が依然として解決されず、ドイツの利益とならない限り、この点について考えるのは難しい。⁽⁴⁾

ドイツに隣接するロシア領土、つまりロシア領ポーランドは、抱え込めばドイツにとって問題の種となるだけで、支配するに魅力的な地域ではない、とドモフスキは考えていた。行政機構によって直接に統治するより、むしろ経済的な利益拡張において、いわば非公式の帝国としてドイツは優越していくであろう。そうなれば、ロシアが従来利益を得ていた活動領域は、ドイツに奪われることになる。具体例としては、それまでロシアに向けられていたフランス資本の新たな投資先がドイツとなり、フランス財界の好評を得て、ひいては財界につながるフランス政界まで味方につけるであろう、という一例が挙げられている。

ロシアは従来、東方問題に関して、ダーダネスク海峡への通路を確保し、バ

ルカン半島を自己の勢力圏とすることを志向していた。しかし、露土戦争の戦後処理のため1878年に開かれたベルリン会議において、ビスマルクが中心となってロシアの南下を抑制して以降は、ドイツという壁に阻まれていた。ロシアの影響力は、アジアにおいてはイギリスの影響力と競合し、同時に、大陸ではドイツによって急速な侵食を受けていたのである。トルコをめぐるロシアとドイツの勢力争いは、それを明示した例であった。ドイツは既に、日露戦争後のロシアを恐れなくともよくなっている、というのが、ドモフスキの見方であった。そうして、ドイツはバルカン半島を勢力圏に収め、アナトリアやバグダットにおける鉄道路線の拡大方向に沿って、政治的影響力や貿易、事業、入植を発展させている。こうした拡大路線は、いずれはイギリスのような植民地帝国の地位へとドイツを押し上げるであろう、という予測が示されている。⁽⁵⁾

ドイツはヨーロッパ大陸で勢力を伸ばし、更には、アジアやアフリカへの植民地主義的拡張にまで興味を示している、とドモフスキは認識していた。ただし、ドイツ国内には、コンスタンティノープルからテヘランまでの植民地主義的拡張主義をとる勢力と、ヨーロッパ大陸南東部つまりバルカンへの拡大にとどめようとする勢力の、二つが存在することに注意を払ってもいた。ドイツ国内において拡張路線を主導する前者を、「全ドイツ主義者たち *wszechniemcy*」⁽⁶⁾とドモフスキは呼んだ。そして、全ドイツ主義者を宥めている後者が、ドイツ政府の指導部つまり「ベルリンの政治家たち」であると、ドモフスキは考えていた。

全ドイツ主義の熱狂者たちの想像力は、余りにも遠くまで行ってしまったために、ベルリンの政治家たちの考えを追い越し、自分たちの計画においては既にオーストリアを篡奪してしまっている。今日、[全ドイツ主義者らの考えでは] ベルリンからバルシャ湾やテヘランまで連続することになっているドイツ領土に沿って、ドイツはロシアを西と南から包囲し、またエジプトや東インドにおけるイギリスを脅かしつつ、バルト海から中央アジアまで、ドイツ帝国の境界線を半円で描いている。⁽⁷⁾

しかし、堅実なベルリンの政治家たちは、「全ドイツ主義者」の幻想に反して、ヨーロッパの南東部つまりバルカン半島へ進出することを選んだ。しかもそれ

は、「静かで平和的な征服」⁽⁸⁾であった。武力による侵攻ではなく、経済活動による掌握である。ドモフスキは、経済帝國的な拡張に、ドイツがもたらす危険の重要な特徴の一つを見ていた。

第五節 未成立国家の外交構想

1907年8月、第二ドゥーマと第三ドゥーマの端境期に、ドモフスキはラッペルスヴィルへ赴いた。それは、1906年7月から1907年7月までの活動を報告した、民族連盟の「活動概要」を提出し、ラッペルスヴィルの亡命者組織から活動資金を得るためであった。ドモフスキは、ラッペルスヴィルでからグリオンへ向かい、そこで『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』の執筆を開始。数週間、その執筆に費やしたが、全てを書き終えることはできなかった。⁽¹⁾おそらく、出版地であるルヴフで、後日完成させたのであろうと言われている。⁽²⁾

この時期の一連の著作では、将来のポーランド国家が置かれる国際関係や、そこでのドイツとの関係を論じつつ、ドモフスキの行動指針となるロシア防壁論を根拠づけていく論理が展開されている。その集大成が、『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』（1908年）であった。これらの論考は、いわば、未成立国家の外交構想として執筆されたものであった。ここでいう外交構想とは、とりわけ、この時期のヨーロッパ国際政治において圧倒的優位にあるドイツに対抗するために、反独同盟を形成することを意味していた。

・「急転の年」——1925年の回想より——

それでは、『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』が執筆された1907年前後、東ヨーロッパにおける政治状況は、どのようなものだったのであろうか。ドモフスキは、1925年に回想して、戦間期ポーランドが「どのような道を経て独立に至ったのか、本当に知ろうとする者は、1907年の政治がどのようなものであったのかを知らねばならない」と述べている。その理由は、この年に国際状況が大きく変化し、とくにロシア政治とドイツ政治において重大な変化が起ったためであった。以下では、『ポーランド政治と国家の再建』（1925年）に基づき、ドモフスキの1907年認識を概観する。

この年、ロシアは日露戦争に敗れた上、深刻な内政危機に瀕していた。その結果、「対外的にもロシアの力は急激に弱まり、同時に、ドイツの立場を強める

ことになった」。更に、仏英はこうした戦争の帰結を予測して、開戦後間もない1904年に英仏協商を結んだのだというのが、彼の分析であった。英仏協商により、「両国間で係争中だった植民地問題は全て処理され、フランスはモロッコで自由行動権を得、ドイツはモロッコに関して利権の外におかれることとなった」。⁽³⁾そして、1906年のアルヘシラス会議において、仏英の和親協商が結ばれ、更に英露間の接近も始まった。次いで1907年には、中央アジアの対立事項について、英露協商が結ばれた。「英仏露の合意は、三大国間の絆を密にするものであり、それが現れたことで、世界政治におけるドイツの役割はますます縮小していかざるを得なかった」。⁽⁴⁾そして、「ヨーロッパは、相互に対立する二大陣営に分かれた。一方には、三国同盟（ドイツ、オーストリア=ハンガリー、イタリア）があるが、イタリアにとってはあまり安定した配置ではなかった。なぜなら、海岸線の長さゆえに、英仏の海軍力に対抗できる状態ではなかったからである。結局、イタリアは地中海に関して、もう一方の陣営である英仏露と合意を結ばねばならなかった」。⁽⁵⁾

国際社会において、英仏露が対独包囲網を形成しつつある状況で、ロシアの内政もまた、安定を取り戻しつつあった。ドモフスキは、その様子について、「ロシアは、既に1907年には、内政危機に対処できるようになっていた」としている。

第三ドゥーマにおいて、政府は、もはや勝者となっていた。ドゥーマの運営は、既に、十月党の穏健政党に握られていた。彼等は、ナショナリストや、右翼過激派と共に、議会の三分の二を占めた。ドゥーマとの協働、とくに、十月党指導者グチコフとの協働によって、ほとんど新編成とも言うべき、軍の大規模な再編が始まった。この仕事は、まだ記憶に新しい敗戦の経験を活かし、速やかに進められ、その進展に伴って、ロシアの対外的な威力が再びよみがえってきた。⁽⁶⁾

内政において、一応の安定を得たロシアは、再び外に目を向け始めた。「ツァーリ国家の対外政策は、自信を取り戻し始め、戦争中に拡大しつつあったドイツへの依存を払いのけた。新たなイギリスとの合意は、ロシアにとって、少なからぬ励ましとなった」。⁽⁷⁾しかしそれは、ドイツとの対立を生む原因となった。なぜなら、「ドイツは、諸大国の新たな結合によって、世界政策の広い

道を進む勢いに歯止めをかけられたため、ベルリンとバグダットを結ぶ線に沿った大陸拡大の大計画を描きつつ、自分たちの力を、最も小規模な抵抗へ、バルカンと西アジアの方向へと向け始めた。それは何よりも、ロシアの利益を阻むものであった」⁽⁸⁾という。

ここで注目すべきことは、「ロシアでは、ドイツに対する好戦的な気分は存在しなかったにもかかわらず」、独露間の衝突は近づいており、「既に1907年には、ロシアとドイツとがぶつかり合う大戦争が起きるのは、時間の問題であることが明らかになっていた」⁽⁹⁾とドモフスキが回想していることである。

このときロシア国内では、「確かに、第三ドゥーマの後、パトリオティックな空気が途方もなく強まっていった。それは、革命への反動や、ユダヤ人へのポグロムといった攻撃に示されたばかりでなく、ロシアの影響力を対外的に拡大し、大国としての役割を強化しようとする熱望の中にも表されていた」という。⁽¹⁰⁾

しかし、戦争が近いというドモフスキの見方は、当時のロシア国内の雰囲気とは、異なっていた。ロシア国内は、まだドイツとの戦争ムードに入っているわけではなかった。

ロシアの進む道を阻むものは何よりもドイツである、という意識は、まだ明確にはなっていなかった。それどころか、国家の内部にはドイツの強い影響が感じられた。そうした影響が、[反独的な]意識を拭い去り、ドイツの危険性から注意をそらそうとしていた。もしロシアの外交がますます明確に反ドイツ的な方向へ進展するなら、それに対しロシア国内では親ドイツ的傾向や、ドイツ人への支援や、それと並行的なポーランド人に対する敵対行為が支配的となる。そうしてロシア内政においてベルリンからの教唆や圧力を被ることになることは明らかであった。⁽¹¹⁾

後述のように、ドイツの「影響力」がロシア内政に大きく作用していたという見解は、ドモフスキのドイツ論において一貫している。ドイツは、経済的・文化的な「影響力」によって、直接軍事力を行使することなしに、ロシアの内政を動かし、その反ドイツ傾向を抑制している、というのである。

更に、この時期ロシアの内務大臣だったドゥルノヴォ (Piotr Nikolajewicz

Durnowo, 1844-1915) が指摘したように、「ロシアにはドイツとの戦争を行う余裕など全くなく、そのような戦争はロシアにとって破滅になりかねない」という考えが常識的だったのであろう。⁽¹²⁾

こうしたロシア国内の見解については、「ロシアの世論は、オーストリア＝ハンガリーを主要な敵とみなしていた」とし、ロシア社会が、「オーストリアとドイツを結びつける絆」の強さを理解せず、必要以上にオーストリア政治とドイツ政治と区別していたと指摘する。そして、「程なくしてロシア人の間違いが明らかになった」と結論付けている。⁽¹³⁾

ただし、ポーランドを分割した三カ国においては、「ロシア＝ドイツ間の戦争が急速に近づいており、その戦争においてポーランド問題が表出するであろう、という認識」があり、ドイツとロシアとの戦争が予見されていた。ひいては、三国間でポーランド問題の処理の仕方が模索されていた、とも指摘している。それは、三政府の対ポーランド政策へのイニシアチヴが、「突如よみがえった」ことに表れていたという。

プロイセンにおいては、前例なく速やかに、反ポーランド立法が進展し、ポーランドの土地においてドイツ性を強化するために莫大な額を供給し、ますます集中的にオストマルク協会が活動を展開した。

オーストリアでは、ポーランドの手から東ガリツィアをもぎとろうという明らかな意思を持って、ウクライナ人に改名したルテニア人を無遠慮にも組織化し、保護を与えた。

ロシアでは、[ポーランド東部の都市] ヘウムに知事を設置し、会議王国から分離させるプロジェクトが持ち上がったこと、ならびに、非公式の布告において東ガリツィアへの欲望を示した。⁽¹⁴⁾

ドモフスキは、これらの対応に、三カ国におけるイニシアチヴの復活を見ていた。こうした三政府の政策について、「三カ国全ての目的は一つ、ポーランドの領土を最小限に抑えるということであった。活気と性急さだが、同時にそこ此処で見られた。それが、ただ偶然の一致であったということが、あり得るであろうか？」と述べている。ブレスト＝リトフスク条約が後に示したように、三政府は合意の上で、ポーランド領土を最小限に抑える形での、ポーランド問題の処理を図っていた、というのである。⁽¹⁵⁾

「1907年に、何が起っているのかを認識し、少しでも状況について知っている人々であれば、我々には無駄にする時間など一瞬たりともないことを理解していたに違いなかった。敵〔ドイツ〕の計画の成功を望まず、ロシアードイツ間の衝突の瞬間に、ポーランド問題を、ベルリンのいう意味ではなく、我々のいう意味において導くには、速やかに行動を重ねなければならなかった」⁽¹⁶⁾と述べているように、1925年の回想においては、ポーランド問題処理を有利に運ぶために、ドイツの政治に対抗することがいかに重大な意味を持っていたかが強調されている。まだロシア国内が気づかないうちから、ポーランド人活動家たちはロシアードイツ戦争の勃発を予想し、その結果、ポーランド問題の処理がベルリンの思惑通りにならないよう、活動を始めていたというのである。1907年以降、静かに、しかし大変な緊張を伴いつつ、二国間の戦いは始まっていたという。このとき、ドイツとロシアは「極めて不均衡な」力関係にあったとドモフスキは分析している。一方のドイツは、ベルリンから大国としての政策を進め、ポーランドも含め「全世界で活動中のエイジェントを通じ」、「ウィーンばかりか、ペテルブルクにおいても、ポーランド問題の運命に強い影響を及ぼしていた」という。⁽¹⁷⁾これに対しロシアは、ようやく対ポーランド政策の編成を始めたばかりであり、「自分たちの目標や方針を、少数の頭脳においてのみ」認識している状態であった。⁽¹⁸⁾

この戦いの経過は、今日まで知られておらず、理解されてこなかったため、ポーランドにかかわりのない人々にとってさえ、興味深いものかもしれない。

1907年に、我々がドゥーマにおいてきた政治的基盤は、我々の足の下から取り除かれてしまった。6月〔第二ドゥーマ解散〕以降、政府が議會を掌握し、議會の大部分は政府を支持してポーランド人に対抗し、従って我々だけが少数議席へと縮小させられ、重要な役割を担うことができなくなる、という予想があった。

それにもかかわらず、私は第三ドゥーマに出席した。それは第一に、名誉の問題であった。ポーランドに一撃が加えられた後で、退くことなどできなかった。…第二に、首都から選出された議員であり、ポーランド・サークルの代表であるという立場が、私にポーランドの名の下に演説し、活動するための公式の肩書きを与えていた。それは、あ

の時期の私にとって、非常に必要なものであった。…同時に、もしドイツーロシア戦争勃発の瞬間にポーランド問題を準備しておくなら、私たちの内的な活動の重心を、ドゥーマの壁の外に移さねばならなかった。⁽¹⁹⁾

ロシアの戦争準備に関する低い評価に比べ、ドイツの好戦性や、ポーランド民族に対する敵対性への認識は、18年後に回想の中で述べられたものであるにもかかわらず、過剰とも言えるほどに危機感に満ちている。戦間期の独立状態は、ドモフスキにとって、「一貫して我々〔ポーランド〕民族の存在を完全に消し去ろうと」するドイツの危険性という思念からの解放を全く意味していなかった。

ドイツ国家の中であれ、国境の外であれ、我々を残酷に根絶しようとしてきたドイツの勢力が衰退するようにと、我々は切に願わざるを得なかった。

ビューローは議会で、「我々は、わが国内のポーランド人と戦っているのみならず、ポーランド民族全体と戦っている」と述べた。これに対する、唯一の実直かつ論理的な回答は、ポーランド民族全体が、ドイツに対抗して戦うことであり、その没落を切望することであった。⁽²⁰⁾

彼の評価からすれば、ドイツとの戦争にロシアが勝利するためには、ロシア軍の再編だけでは不十分であった。多少なりとも、「ロシア政治上の準備が必要であったし、国内におけるドイツの影響力を打ち壊すことが必要であった」という。

おそらく歴史上、ロシアほど奇妙な、はっきり言って醜怪な状況にある国家は、存在しなかったであろう。ロシアの対外政策は、そうならざるを得なかったために反ドイツ的であったが、他方で内政では、親ドイツ傾向が支配していた。ロシア政府のような、これほどまで協調のない政府の中でのみ、外務大臣とそれ以外の閣僚との著しい対照が生じたのであろう。こうした事態の根本的な原因は過去に存在した。そして、そこではプロイセンが大国としての成功を収めていた。

フリードリヒ大王は、シニカルに言うなら「ポーランドの聖体」を食するという共通点においてロシアと結びつくことが、プロイセンにとってどんなに大きな意味を持つことになるか、既に理解していた。⁽²¹⁾

以上の状況をドモフスキは総括して、「ポーランド分割を機に結ばれたロシアとプロイセンとの関係は、対外政策の反目によって対立することとなり、ロシアはプロイセンとの断絶に至った。しかし、ポーランド人は1863年の蜂起を通じて、ビスマルクに改めて友好関係を緊密にする機会を与えてしまった。仏露同盟によって、ロシアがドイツには頼らずに国際的な立場を得ると、日露戦争と内政危機がロシアの対外的立場を弱め、ドイツに対するロシアの依存は再び大きくなり、ポーランド人の革命主義者たちが、再びそれを少々促進することになった。」⁽²²⁾としている。つまり、ロシア政府のドイツに対する依存は、外交上の対独包囲網を英仏と共に築いたことで弱まる気配を見せながら、内政におけるドイツの「影響力」の作用や、ポーランド人による近視眼的な武装蜂起や革命主義活動によって、よみがえってしまった、というのである。

ロシア政府がドイツに依存していることを暴露し、そうした依存を白状せざるを得ない、あるいは、見解を変えざるを得ないような難しい状況に、ロシア政府を置くことだけでは十分でなかった。ドイツとの戦いにおいてポーランドはロシアの側に立つであろうという意識をロシアにおいて広め、口先だけでなく、活動においても、ドイツの傀儡になってロシアに対抗したくないと我々が思っていることを示し、ロシア世論を組織して、ポーランドの破壊へ向けてロシアをドイツの道具としている政策に対抗する必要があった。⁽²³⁾

こうしてみると、少なくとも1925年の回想からする限り、ロシアードイツ間の戦争が勃発した場合、ドモフスキがロシアを支持し、「ポーランド問題」の解決からドイツの「影響力」を排除しようとしていた様子が伺える。それは、英仏露による対独包囲網や、ひいてはドイツとの戦争を利用し、「ポーランド問題」の処理を有利に進めようという外交構想であった。以下では、1907-1908年にかけての彼の著述をもとに、そうした外交構想がいかにして考え出されたのか、

また、どの程度明確化されていたのかを検証する。

・「ポーランド問題」の転換

後年の回想における1907年分析は、ある程度歴史の後知恵において、ロシア革命後の戦争の利用を論じた側面があることは否めない。では、「ポーランド問題」の処理と、ドイツ-ロシア間関係について、1907-1908年当時はどうのよう論じられていたのであろうか。

『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』において、彼が論じている外交構想を支える柱の一つは、「ポーランド問題」の意味が転換したという確信にあった。

1864年以降、「ポーランド問題」は、分割三国の内政問題とされ、国際政治の舞台においても、またポーランド人自身の意識においても、「完全に葬られたように見えていた」。⁽²⁴⁾それは第一に「ポーランドの蜂起の7年後にフランスがプロイセンとの戦争において撃破され辱められ、」第二に「プロイセンの優越のもとに統一されたドイツと、アレクサンドル二世の改革後、新編成の軍によって強化されたロシアという、ポーランド独立にとっての二つの敵が、ヨーロッパの勢力配置において主要かつ支配的になり、」その結果、ポーランド人の中の「最も頑固な楽観主義者たちでさえ、外からいかなる援助を受ける望みも潰えた」と認めざるを得なくなった⁽²⁵⁾ためであった。

新たな国際情勢において、ポーランド問題を取り上げることで利益を得る国家は一つとして存在しなかったし、ポーランド人が政治ファクターとして何の可視的な価値も示さなかったにもかかわらず、もしどこかにポーランド問題を取り上げようという願望が現れたとしても、二つの最強国家は完全な沈黙を命ずることができたであろう。

ポーランド領土を保有する三国家のそれぞれにおいて、ポーランド問題は、単に国内問題であり、専らその国に属する問題であり、外部からのどのような干渉をも認めない問題であると見なされていた。しかも、その問題の状況は、どの国においても、国家に対して深刻で危険な性格のものとは見なされていなかった。⁽²⁶⁾

こうした、いわば古い「ポーランド問題」は、ポーランド人にとっては「政

治的独立の回復」の問題であり、諸外国にとっては、「ロシアの勢力を弱め、」
「ロシアとヨーロッパとの間にダムを築く」という問題であった。⁽²⁷⁾その後、
一月蜂起の鎮圧と共に「ポーランド問題」は葬られた。それが、1907年前後にな
って再浮上してきたというのである。しかも、その意味を大きく転換して、
よみがえったのであった。そうであるとすれば、『ドイツ、ロシアそしてポーラ
ンド問題』は、ロシアードイツ戦争の予感の中で、非常に緊張感（あるいは危
機感）を持って書かれた文章の集積といえる。

彼は、1907年までの十数年間に、一方ではポーランド政治の内発的・本質的
基礎がしっかりと形成され、他方でヨーロッパの国際状況は全面的に変化して
いたため、その結果として、ポーランド問題は、19世紀前半に有していたのと
は全く異なる、新たな役割を担うようになったと述べている。⁽²⁸⁾普仏戦争にお
けるプロイセンの勝利およびドイツ帝国建設の結果、「ヨーロッパにおける第
一位の席」をドイツは占めるようになった。ドイツは勢力を急速に伸ばし、他
の諸民族の利益を阻み、中世の神聖ローマ帝国が果たしていたよりも大きな役
割を得ようという野望を抱いていた、とドモフスキは強調する。他方で、日露
戦争におけるロシアの先の敗北ならびにツァーリ国家の内政危機は、ヨーロッ
パ全体が長きにわたって恐れていたロシアの威力が、「思っていたよりもずっ
と脆弱な基盤の上に築かれていたものであったことを明らかにした」のであ
る。⁽²⁹⁾

こうして、ヨーロッパの勢力均衡において、成長するドイツに対し、弱体化
したロシアは、全く貧弱な立場に置かれるようになった、と彼は分析している。
そして、次のように説く。

今日、西ヨーロッパ諸国の利益は、ロシアの弱体化にあるのではなく、
ロシアを強化し、ドイツに対抗させるに十分な能力を持たせるこ
とにある。なぜなら、さもなければ、ロシアはベルリン政治の意のま
まの道具に、ドイツの影響圏に、ドイツが徐々に征服していく対象に
なってしまうからである。

こうした国際状況において、ポーランド社会にとって明らかなのは、
もし今後、ポーランド社会に、民族的生存の破滅という危機が差し迫
るとすれば、それはロシアからではなく、ドイツからもたらされる、
ということである。⁽³⁰⁾

この引用に続く部分で、ドモフスキは、ロシア支配が用いる「ロシア化」という手段が「ポーランド人という民族の特殊性や独自性を少しも弱めることができなかった」と述べている。そして、ロシア支配によってポーランド民族の文化的成長が抑制された等のマイナス面を指摘しながらも、「ロシアはもう決して、少なくとも予見できる将来においては、反ポーランド的な政治システムを獲得するほどの能力を持たないであろう」と断じている。⁽³¹⁾

これに対し、ドイツに対する見方は、首尾一貫してポーランドにとって厳しいものである。「ドイツがポーランドの民族性にとって危険なものであり続け、プロイセン政府を通じて、我々の民族に対する戦いの手段を、絶えず先鋭化させ」ていき、ますます大きな危険をもたらすことになる、と予測している。その結果、ポーランドは、ロシアとオーストリアという残る二つの分割国に頼らざるを得なくなる、というのが彼の見方であった。しかし、ロシアもオーストリアも、ドイツに依存しているため、「今日ポーランド民族の運命全体にドイツは強い影響力を及ぼしている」とも指摘している。

こうした危険性について、ドイツがポーランド人という種族の特殊性を消し去るためだと理解してはいけな。なぜなら、この点で経験が示しているのは、その無力さなのだから。ドイツ側からなされる攻撃は、何より、我々の生存の根本的要素（それらの要素のおかげで、我々は、政治的独立を失いつつも、独自の伝統や、独自の民族的思想をもつ政治的民族であり続け、国家をもつ他の大きな諸民族とも対等な民族であり続けている）を脱組織化し、消滅させることに向けられている。ドイツは、民族的独自性や自立した生活、高水準の文化の維持に不可欠な、また（プロイセン分割領の同胞たちが用いる定義での）ポーランド民族のプロレタリア化に不可欠な、これらの文化的・経済的手段を、我々から切り離そうと切望している。⁽³²⁾

換言するなら、ロシア支配による損害が表面的な文化的発展の抑制にとどまるのに対し、ドイツの政策が与える打撃は、ポーランド民族の存在そのものを脅かす、民族としての生存手段を一つ一つ断ち切っていく性質のものである、とドモフスキは認識していた。

ロシアが衰退し、それと表裏一体の関係においてドイツの「影響力」が増大

しつつあるヨーロッパの国際情勢において、ドモフスキにとって「ポーランド問題」の新たな意味とは、民族の生存をかけたドイツとの戦いに他ならなかった。

むすび

ポーランドの政治は、ポーランドの境界内で完結するものではない。なぜなら、[ロシア、プロイセン、オーストリアという]三国家へのポーランド領土の併合は、我々の民族を3つの断片にし、3つの国家機構の下に置かれた3つの部分に分けてしまい、また同時に、ある種の役割を[ポーランド人が]ロシアやプロイセン、オーストリアの[国内]政治において演じざるを得なくさせているからだ。⁽¹⁾

ここに引用したのは、1904年1月に書かれたドモフスキの小論「ポーランド政治の領域としての諸分割国家」の一節である。ここまで論証してきたように、ドモフスキは、文化的・民族的にポーランド人より高次にあると認めているドイツ人に対して畏敬の念を持つと同時に、その影響力の強さを警戒していた。それとは対照的に、第二章で詳述したように、社会ダーウィニズ的な観点に基づき、ロシア人という「人種」を、野蛮で暴力的な存在として嫌悪あるいは蔑視していた。ドモフスキの思想的立場は一見「服従派」のようだが、しかし、ロシアに追従していたわけではなかったのである。それは、第四章で述べたとおり、日露戦争に際してドモフスキが示した、激しいロシア支配への反発からも明らかである。にもかかわらずドモフスキは、あえてロシア内政のダイナミズムに則ったポーランド自立を目指した。それは、第五章で見たように、民族性というものに立脚するドイツ国家がもつ、異質な危険性を恐れたためであった。

ドモフスキは、ロシアという最も身近な敵対者にのみ目を奪われることなく、東ヨーロッパやヨーロッパ全体、あるいは日本やアメリカも含むヨーロッパ以外の地域との関係も視野に入れた枠組みの中に、ポーランド問題を位置づけていた。さめたりアリストの視点からロシア内政の文脈を見定め、ドイツの危険性に警告を発しつづけたドモフスキの思想的立場は、統一と独立を目指すパッションと、ナショナリズムによって貫かれていたのである。

日露戦争の直前、ロシア領ポーランドにおいては、ロシアに対する反発が勢いを増しつつあった。武装蜂起への気運さえ高まる中、ドモフスキはあえてロシア（そしてプロイセンやオーストリア）の内政に参画する重要性を訴えた。

〔三帝国の内政における〕役割との関わりを断ち、それがもつ影響を断つことは、ロシア政治やプロイセン政治、オーストリア政治への自制であり、〔目先のことしか見ていない〕近視眼の証拠であり、自己の無力さを感じている証拠である。我々の民族の運命は、まず我々の力を伸ばすことに、次にこれら三国家の運命にかかっている。⁽²⁾

武力ではなく政治による戦いへ眼を向けさせようとするドモフスキの緊張感、以下の文面にも表れている。

政治は、〔武力による〕典型的な戦争と同様、優れた戦い的手段なのだ。政治活動においては直接ライフルや大砲を用いない、という差異を伴ってはいるが、前者においても後者においても、民族の本質的・道徳的な力が戦っていることには変わらない。⁽³⁾

1917年、「まさにロシアの最後となる」⁽⁴⁾ボリシェヴィキ革命により、ツァーリの支配は崩壊した。ツァーリの帝国の消滅とロシア内政の民主化は、ドモフスキの予想以上に急激に、数々の非ロシア人自治国の成立を可能にした。そうしたロシアの変化と同時に、ドイツとオーストリアの敗戦によって第一次大戦が終結するという歴史の偶然が、ポーランドの独立をもたらしたのであった。以降ドモフスキは、主にイギリスやフランスでの外交活動に力を尽くし、ポーランド国内で政治の中心に戻ることはなかった。しかし、常にロシアだけでなくドイツの危険性を意識していたことからわかるように、国際情勢を広い視野で捉えるドモフスキの感性は、ポーランド国内で指導者となったピウスツキに劣るものではなかった。

1918年11月14日、病床のドモフスキを遠くパリに残したまま、ピウスツキを国家主席とするポーランド第二共和国は再生を遂げた。けれども、150年にわたる異民族帝国支配の後によく訪れたこの新しい時代も、ポーランドの人々を平穏な日々へと導くものではなかった。

1939年9月、ドモフスキの死の半年後に、彼が生前恐れ続けたドイツがポーランドへ侵攻した。1944年8月、ついにワルシャワ蜂起で武器を取ったワルシャワ市民をナチスは鎮圧し、ソビエトが静観する中、同年10月、熾烈な抵抗の末にポーランドの「魂の首府」⁽⁵⁾は壊滅した。蜂起のもたらした損害は、その市街を灰燼に帰しただけでなく、知識人層を中心とする甚大な人的被害を伴い、その後半世紀に渡ってポーランドの独立と自由を損なった。ポーランドは、ソビエトの傘の下に収められ、長い従属の時を過ごすこととなるのである。

「夜は徐々にしか明けない」⁽⁶⁾という。曙光を求めるポーランドはなお、暁の闇にとどまり続けねばならなかったのである。

註

ドモフスキの一次文献・引用中は、“patryotyzm”など現代の表記と異なるものがあるが、原典のまま表記する。

第四章 闘争のロゴス

(1) Dmowski, “Doktryna i realizm w polityce”, in Dmowski, *Dziesięć Lat Walki* (Częstochowa, 1938) (以下、Dmowski, “Doktryna”. と表記), s.209.

(2) Dmowski, “Wobec kryzysu rosyjskiego”, in Dmowski, *Dziesięć Lat Walki* (Częstochowa, 1938) (以下、Dmowski, “Wobec”. と表記), s.302-314.

(3) Dmowski, “Wobec”. s.302.

(4) Dmowski, “Wobec”. s.303.

(5) Dmowski, “Ojczyzna i doktryna”, in Dmowski, *Dziesięć Lat Walki* (Częstochowa, 1938) (以下、Dmowski, “Ojczyzna”. と表記), s.46-47.

(6) 強調は原典のまま。Dmowski, “Ojczyzna”. s.49.

(7) Dmowski, “Ojczyzna”. s.48-49.

(8) Dmowski, “Ojczyzna”. s.49.

(9) *Ibid.*

(10) *Ibid.*

(11) *Ibid.* 強調原典のとおり。

(12) Dmowski, “Ojczyzna”. s.50.

(13) *Ibid.*

(14) *Ibid.*

(15) Dmowski, “Ojczyzna”. s.50-51.

(16) そのほか、様々な類型の小規模の教条主義が存在することを指摘しつつも、それらは政治において果たす役割が少ない分、与える害も少ないとしている。

Dmowski, “Ojezyczna”. s.51.

⁽¹⁷⁾ Dmowski, “Doktryna”. s.209.

⁽¹⁸⁾ Dmowski, “Doktryna”. s.208.

⁽¹⁹⁾ Dmowski, “Doktryna”. s.209.

⁽²⁰⁾ ドモフスキの視点から見た場合、「服従派」は、ポーランド政治思想が二つの極端な立場つまり革命派と忠誠主義の間をスイッチの切り替わりのように行ったり来たりする二極的な状況の中で、中道を求めている立場を強調する人々と認識されていた。ドモフスキによれば、服従派は、「テーゼとアンチテーゼは存在するが、しかし、シンテーゼを探そうという意欲すらない」ポーランド社会に対する批判を唱えるものとされた。しかし、こうした主張を、ドモフスキは、「スタインチクたちが思いついた」、「時代錯誤な」構想であると断じ、批判した。Dmowski, “Doktryna”. s.208.

第一節 プログラム転換

⁽¹⁾ 民族連盟 Liga Narodowa と国民民主党 Stronnictwo Narodowo-Demokratyczne の関係については、以下の説明を参照。

前章で詳述したように、『我々のパトリオティズム』（1893年）は、ロシア領ポーランドとくにワルシャワにおいて、有機的労働や服従派の考えに反発する若年層を中心に好評を博した。この成功によって、ドモフスキは民族連盟の中で指導的地位を占めることとなった。それは、民族連盟が、国民民主党へと移行する第一歩であった。この民族連盟という政治グループは、当初から、秘密組織としての側面と、デモのような公然の活動との「二重性」をもつ組織であった。当時ロシア領ポーランドでは、政治的活動は認められておらず、ドモフスキらは専ら非合法的に活動を展開していた。そうした秘密組織としての活動と平行して、1891-1895年には、公然のデモンストレーションが組織されていた。

政治活動が認められていないロシア領ポーランドにおいて、「こんなところで合法的に活動する政党をつくるという発想はショッキングなものであった」と宮島直機は指摘している。地下活動としての秘密性という一面と、公然の活動を行う一面とが同時に存在する二重性の「新鮮さ」が、民族連盟の特徴であった。宮島直機『ポーランド近代政治史研究』（中央大学出版部、1978年）三〇頁。

民族連盟に、組織上の変化をもたらしたのが、「ロシア分割領における国民民主党のプログラム」‘Program Stronnictwa Demokratyczno-Narodowego w zaborze rosyjskim’であった。これは、1897年6月に民族連盟の年次報告において示されたもので、これにより公然と政治活動を行う政党として国民民主党が結成された。その目的は、「ポーランド全体のための、一つの党を創出する第一歩」を踏み出すことにあった。以上、Fountain, *op.cit.* pp.41-44を参照。また年代については、Kułakowski, Mariusz, *Roman Dmowski w Świetle Listów i*

Wspomnień (Londyn, 1968) t.1, s.299-301.

(2) Pobóg-Malinowski, Władysław, *Narodowa Demokracja, 1887-1918 : fakty i dokumenty* (Warszawa, 1978) (以下、Pobóg-Malinowski, *Narodowa Demokracja*. と表記), s.240.

(3) *Ibid.*

(4) Dmowski, Roman, *Nasz Patryotyzm* (Berlin, 1893) (以下、Dmowski, *Nasz.* と表記), s.24.

(5) Pobóg-Malinowski, *Narodowa Demokracja*. s.236.

(6) 『全ポーランド評論』 *Przegląd Wszechpolski* は、その前身である『移住評論』 *Przegląd Emigracyjny* をドモフスキが改称し、1895年1月オーストリア領ポーランドのルヴフで創設した民族連盟の準機関紙。2週間に1号の割合で発行されており、価格表から判断する限り、「オーストリア=ハンガリー君主国」、「ロシア帝国分割領」、「ドイツ帝国及びブラジル」、「フランス及びローマ・カトリック諸国、ブラジル、アルゼンチン」、「英国」そして「アメリカ合衆国」へ配達されていた。ドモフスキは、海外に渡航していた時期を除いて編集を務めていた。ドモフスキが同紙に最初の論文「民族の同一性」を寄せたのは、1895年3月15日であった。Skr.(ドモフスキの筆名 Skrzycki の略), 'Jedność Narodowa', *Przegląd Wszechpolski*, nr.6 dnia 15 Marca 1895, s.81, s.98, s.113.

(7) Pobóg-Malinowski, *Narodowa Demokracja*. s.236 より再引用。原典は 'W Naszym Obozie', *Przegląd Wszechpolski*, lipiec, 1901, s.429. 強調は原典のまま。

(8) Pobóg-Malinowski, *Narodowa Demokracja*. s.236.

(9) Dmowski, *Nasz.* s.24.

(10) 「有機的労働 *praca organiczna*」という言葉は、19世紀中葉以降慣用的に用いられていた。経済的また文化的発展を重視する運動だったことから、「実業」とも訳される。ロシア領ポーランドにおいては、シフィエントホフスキやプルスが代表的な推進者であった。

(11) Bułhak, Władysław, *Dmowski-Rosja a kwestia polska : u źródeł orientacji rosyjskiej obozu narodowego 1886-1908* (Warszawa, 2000) (以下、Bułhak, *Dmowski-Rosja*. と表記), s.74.

(12) Kułakowski, *op.cit.* t.1, s.204-205.

第二節 ポーランド人とは誰か

(1) Porter, Brian, *When Nationalism Began to Hate : Imagining Modern Politics in Nineteenth-century Poland* (New York, 2000), p.202より再引用。

なお、I. ドイツチャーが「ユダヤ人とは何か」という問いに関して指摘したように、「ポーランド人とは誰か」という問いもまた、それがいかなる世界、環境におかれたポーランド人であったのかという問題を抜きにしては答えられな

い。「とりまく外界や、自らを分裂させ人類をたち切っている敵対関係」を考慮せず、ポーランド人を定義することは、無意味であろう。したがって本節の課題は、現状において三分割され、国家をもたない状況にあるポーランド民族が、現在どのような意思を持って、また将来どのような民族として自己の再構成を目指すのか、ドイツとロシアの中間にあって生存を獲得するのかという視点から、ドモフスキの思想におけるポーランド人観を明らかにすることにある。I. ドイツチャー、鈴木一郎訳『非ユダヤ的ユダヤ人』(岩波新書、1970年)、五五-五六頁。

(2) Porter, *op.cit.* p.202.

(3) Dmowski, Roman, *Mysli Nowoczesnego Polaka* (1934, Warszawa) (以下、Dmowski, *Mysli.* と表記), s.29.

(4) ミシエル・ド・モンテーニュ、宮下志朗編訳『モンテーニュ エッセイ抄』(みすず書房、2003年)、七四頁。

(5) Porter, *op.cit.* p.204. 国民民主党系(当初ポーランド連盟系)組織は、1880年代末から農村において、一般的な知識や農業知識を広めるための啓蒙活動を行っていた。農民向け雑誌『ポーランド人』の発起人であり、農村問題に詳しくあったポプワフスキ(1888-1908年)にかけ農村で活動)をはじめ、人民向け書籍出版委員会の指導者となったアレクサンデル・ザヴァツキ(Aleksander Zawadzki)など、国民民主党の主要メンバーたちは、三分割領それぞれにおいて、農民の間に入っての活動に従事していた。主要な農村組織については、Wolsza, Tadeusz, *Narodowa Demokracja wobec Chłopów w Latach 1887-1914 Programy, Polityka, Działalność* (Warszawa, 1992), s.307-308.

第三節 リアリストの04年革命

(1) Dmowski, “Wobec Wojny Rosyjsko-Japońskiej”, in Dmowski, *Dziesięć Lat Walki* (Częstochowa, 1938) (以下、Dmowski, “Wobec Wojny”. と表記), s.358-364.

(2) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.358.

(3) 阪東宏『ポーランド人と日露戦争』(青木書店、1995年)九九、一一三-一二三頁。

(4) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.358.

(5) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.358-359.

(6) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.359

(7) *Ibid.*

(8) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.359-360.

(9) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.360

(10) *Ibid.* プレーヴェ (Vyacheslav Konstantinovich Pleve, 1846-1904) は、ワルシャワにドイツ人中学教師の子として生まれ、モスクワ大学法学部を卒業。帝

政ロシアの右翼内務官僚。警察局長(1881-84)、内務次官(1884-94)を歴任し、1902年4月から内相。反動的なことで知られ、内相就任直後、ハリコフ県、ポルタワ県の農民蜂起を徹底して弾圧した。1903年のキシニョフにおけるボグロムに関しても責任があったとされる。極東で日本との緊張が高まる中、政敵ウィッテを打倒するため、強硬派ベゾブラゾフを支持し、日露戦争開戦を推進することとなった。また、クロパトキン(Aleksei Nikolaevich Kuropatkin, 1848-1925)は、1898-1904年に陸軍大臣。極東軍総司令官として1904-05年の日露戦争を指揮したが、能力を疑問視され、1905年2-3月に行われた奉天の会戦で大敗した後、第一軍司令官に左遷された。

(11) 田中陽児、倉持俊一、和田春樹編『ロシア史2—18-19世紀—』(山川出版社、1994年)三三五頁。

(12) 同上、三三五頁。

(13) 同上、三三八頁。和田春樹、和田あき子『血の日曜日』(中央公論社、1970年)四-五頁。

(14) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.361.

(15) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.362. 文中の詩は、ミツキェヴィチ「ペテルブルク」(1832年)からの引用。以下は前後の部分の抄訳。「人々のために町を作るのではなく、自分のために首都を作るよう、ツァーは命じ/その意思の絶対性を示した[...]ローマは人々の手によって建てられ/ヴェニスに金持ちが作った/けれどもペテルブルクを見た人はいった、おそらくこれを建てたのは悪魔であろう、と[...]巨大な建物、これは石材の、それは煉瓦の[...]一様にそろう屋根と壁[...]その人ごみの間を数人が歩いていった[...]彼らは街を見ている/基礎、壁、屋根/大理石、花崗岩/両目は試しているかのように離れない/一つ一つの煉瓦はしっかりとめられているだろうか/そして彼らは絶望とともに肩を落とした/あたかもこう考えているかのように——誰もこれらの壁を倒すことはない!と[...]巡礼は、悪意に満ちて微笑んだ/手をふり上げ、握り締め、復讐を込めて石材にたたきつけた/あたかも、街の岩石すべてを威嚇したかのように」。原語の詩については、Mickiewicz, Adam, *Dziady* (Warszawa, 1994)等を参照。

(16) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.362.

(17) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.362-363.

(18) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.363.

(19) Dmowski, “Wobec Wojny”. s.364.

第五章 未成立国家の外交構想——『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』を中心に——

(1) Micewski, Andrzej, *Roman Dmowski* (Warszawa, 1971), s.49-50.

(2) Dmowski, Roman, *Polityka Polska i Odbudowanie Państwa* (Warszawa, 1989) (以下、Dmowski, *Polityka*. と表記), t.1, s.116.

(3) Micewski, *op.cit.* s.150. Dmowski, *Polityka*. t.1, s.116.

(4) 『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』は、1907年に『全ポーランド評論』に掲載された一連の外交論を、翌1908年に再編し出版したもの。

(5) Micewski, *op.cit.* s.150.

第一節 誰を敵とするのか

(1) Pobóg-Malinowski, *Narodowa Demokracja*. s.232-233.

(2) Pobóg-Malinowski, *Narodowa Demokracja*. s.233.

(3) ドモフスキの著作では、モスカル Moscar (ロシア人を指す) 等の蔑称が頻繁に用いられる。また、ヤギを意味するカツアップ kacap という単語によって、ロシア語を話す人・ロシア系ユダヤ人を指す場合もあった。ただし、注意しなければならないのは、比較的ニュートラルな名称として用いられる場合であっても「ロシア人 Rosjanie」や「ドイツ人 Niemcy」、あるいは「ユダヤ人 Żydzi」という言葉が発せられる場合に、その言葉がもつ背景から完全に自由ではありえない、という点である。おそらく今日においても、語られる状況によっては、いわゆるニュートラルな名称も負の価値を持つことがある。「民族」あるいは「人種」など、意図的に他者の出自に触れる場合、あからさまな蔑称でないにせよ何らかの付加を負う可能性は避けられない。

(4) Dmowski, Roman, “Nasze stanowisko wobec Niemiec i Rosji (lipiec 1903 r.)”, in, Dmowski, Roman, *Dziesięć lat Walki* (Częstochowa, 1938) (以下、Dmowski, “Nasze stanowisko”. と表記), s.148.

(5) Dmowski, “Nasze stanowisko”. s.157. なお、ここでの議論と対照的に、1902年5月の Dmowski, “Ojczyzna”. s.50においては、「(スラヴ的教条主義は) ドイツ性との戦いにおいてロシアの後援を獲得しようとしている。たとえ、その後援の代償として東部国境において受ける損失が、西部国境において獲得できるものを数倍上回っていたとしても」とし、ロシアから被る損害がドイツからのそれよりも大きいものとして、「スラヴ的教条主義」を批判している。したがって、おそらく1903年前半がロシア志向の明確化した転換期であったと推測される。

(6) Dmowski, “Nasze stanowisko”. s.158. 文中の「王国」は、会議王国つまりロシア領ポーランドのうち、東方の現ウクライナやベラルーシを除いた地域。

(7) Kułakowski, *op.cit.* s.245.

(8) Dmowski, “Nasze stanowisko”. s.158. ドモフスキは著作の中で、ドイツ Niemcy という語とプロイセン Prusy という語を使い分けている。1871年以降、プロイセンがドイツ全体を統一し、勢力を伸ばしていく、というのがドモフスキの基本的認識であった。「プロイセン」とほぼ同義で用いられているのが

「ホーエンツォレルン人の国家」という言い廻しであり、それが各地のドイツ人の忠誠を集める、とされた。ドイツの脅威を論じる場合にも、常にプロシアが中心に置かれていたといえる。例えば、Dmowski, Roman, *Niemcy Rosja i Kwestja Polska* (Częstochowa, 1938) (以下、Dmowski, *Niemcy*. と表記) s.133-134. また、Dmowski, Roman, 'Poland Old and New' in Duff, J. (ed.) *Russian Realities & Problems* (Cambridge, 1917), pp.83-121参照。

⁽⁹⁾ 1894年にポズナン地方からポーランド人を根絶することを目的として設立されたドイツ人の組織「ハカタ」のメンバーをさす。

⁽¹⁰⁾ ナウマンは、「大農場はポーランド人、スラヴ人を呼び込んでいるのです。…ポーランド人は入ってこようとします。彼らもまた生きたいというわけです。しかしそれは、我々民族にとっては脅威なのです。保守派の支配下にある東部は、国民的にいって脅威なのです。」と訴えている。東部プロイセンにおけるポーランド人農業労働者の増加に、ドイツ側としても危機感を抱いていた様子が伺える。今野元『マックス・ヴェーバーとポーランド問題 ヴィルヘルム期ドイツ・ナショナリズムと研究序説』（東京大学出版会、2003年）一〇三頁より再引用。

⁽¹¹⁾ Dmowski, “Nasze stanowisko”. s.158.

⁽¹²⁾ Dmowski, “Nasze stanowisko”. s.159.

⁽¹³⁾ たとえば、農村の自治拡大や、新聞検閲の緩和が実施されていた。宮島、前出、三七頁。

第二節 新しい帝国

⁽¹⁾ Kułakowski, *op.cit.* t.1, s.156.

⁽²⁾ Kułakowski, *op.cit.* t.1, s.300.

⁽³⁾ Marczewski, Jerzy, *Narodowa Demokracja w Poznańskim 1900-1914* (Warszawa, 1967), s.102.

⁽⁴⁾ Hagen, William W. *Germans, Poles and Jews* (1980, Chicago), pp.232-233.

⁽⁵⁾ Hagen, *op.cit.* p.234. 『全ポーランド評論』紙上においても、1902年、プロイセン領ポーランドのための国民民主党綱領が公表された。Micewski, *op.cit.* s.48.

⁽⁶⁾ ただし、『主導者』紙の編集活動は1908年に没するまで続けた。シマンスキは当初、国民民主党が社会革命を目指す潜在性を持っているのではないかと疑っていた。しかし、1905年に、ドモフスキが社会主義革命にも、ツァーリ支配からの民族的独立にも反対したため、国民民主党に信頼をおくようになったという。Hagen, *op.cit.* p.234.

⁽⁷⁾ Kułakowski, *op.cit.* t.1, s.300, s.421.

⁽⁸⁾ テイトゥス・フィリポーヴィチ (Tytus Filipowicz) の証言が以下の文献に収録されている。Jędrzejewicz, Wacław, “Sprawa `Wieczoru, (Józef Piłsudski a

wojna japoński-rosyjska 1904-1905)”, *Zeszyty Historyczne*, 1941, no.27, p.50.

(9) 1903年1月1日ミウコフスキ宛ての書簡。Kułakowski, *op.cit.* t.1, s.246-247.

(10) Dmowski, *Niemcy*. s.137.

(11) フィリポーヴィチの回想によると、ドモフスキは、ロシアの「人民の意志」がドイツの支援を受けたものだった、と論じている。なお、ドモフスキは、ドイツ内部にはロシア官僚に協力する者がいる、とも論じている。

(12) Dmowski, *Niemcy*. s.137.

(13) Dmowski, *Niemcy*. s.138.

第三節 ホーエンツォレルン国家の拡張

(1) Dmowski, *Niemcy*. s.242.

(2) Dmowski, *Niemcy*. s.132. オーストリアとハンガリーの関係については、Dmowski, *Niemcy*. s.133参照。

(3) Dmowski, *Niemcy*. s.132.

(4) *Ibid.*

(5) 「二つの半-君主国」は、原文では、obu półów Monarchji とされ、オーストリア=ハンガリー二重帝国をさしている。Dmowski, *Niemcy*. s.133.

(6) Dmowski, *Niemcy*. s.133-134.

(7) Dmowski, *Niemcy*. s.134-135.

第四節 影響力の政治

(1) Kułakowski, *op.cit.* t.1, s.415.

(2) Dmowski, *Niemcy*. s.129-145.

(3) Dmowski, *Niemcy*. s.129-130.

(4) Dmowski, *Niemcy*. s.131.

(5) *Ibid.*

(6) 一般的には、「全ドイツ主義」は、ドイツとオーストリアを統一する、という考えをさしている。したがって、ここで示されているドモフスキの「全ドイツ主義」観は、普く喧伝された全ドイツ主義に対する誇張された一解釈に過ぎない。「全ドイツ主義」といっても、そこに含まれる考えの幅はかなり広範であり、ドイツ人がいない地域にまで、異民族支配としての植民地を拡張しようという志向を含まない場合が主流であったことに注意しなくてはならない。なお、「全ドイツ主義者 wszechniemcy」という表現は、ドイツ語の alldeutsch から、ポーランド語へ訳出したものと考えられる。「全ドイツ主義」が、ドモフスキの「全ポーランド主義」にも影響を与えた可能性もある。しかし、ドモフスキの「全ポーランド主義」は、ポプワフスキを通じてボリシェヴィキから取り入れられたとする見解も示されている。Bułhak, *Dmowski-Rosja*. s.46.

(7) Dmowski, *Niemcy*. s.130.

(8) Dmowski, *Niemcy*. s.131.

第五節 未成立国家の外交構想

(1) Kułakowski, *op.cit.* t.1, s.415.

(2) Micewski, *op.cit.* s.150.

(3) Dmowski, *Polityka*. s.124

(4) Dmowski, *Polityka*. s.125.

(5) *Ibid.*

(6) Dmowski, *Polityka*. s.125-126. 十月党(所謂「オクチャプリスト」正式には「十月十七日連合」)は、第三ドゥーマにおいて、148議席を有して第一党となった。アレクサンデル・グチコフ(Aleksandr Ivanovich Guchkov, 1862-1936)はその指導者の一人であり、ロシアへの愛国心に則り日露戦争に参加した経歴を持つ。

(7) Dmowski, *Polityka*. s.126.

(8) *Ibid.*

(9) *Ibid.*

(10) *Ibid.*

(11) *Ibid.*

(12) Dmowski, *Polityka*. s.126-127, note 10.

(13) Dmowski, *Polityka*. s.127.

(14) *Ibid.* オーストリア領ポーランド(ガリツィア)におけるウクライナ・ナショナリズム運動については、Davies, Norman, *God's Playground* (Oxford, 2005) (以下、Davies, *God's*. と表記) pp.115-116参照。ウクライナは、1667年アンドルソボの講和によりポーランドとモスクワによって分割され、ドニエプル右岸はポーランド領、左岸はロシア領とされた。その後、ポーランド分割により、ポーランド領ウクライナのうち、ガリツィアはオーストリア領に、それ以外はロシア領になった。オーストリア領においては、ロシア領よりも、ウクライナ民族運動が進展していた。ロシア領と異なり、オーストリア領では合同教会が迫害される心配はなかったし、ルテニア語での初等教育を行うこともできた。ただし、「ウクライナ人」という名称が受容されるようになったのは、ようやく19世紀末になってからであった。1882年以降、ナロドフツィ Narodovtsy と呼ばれる、若いポピュリストのグループが脚光を浴びるようになり、政治活動が激化したのである。彼らは、ロシア領にいるウクライナ人との連携を密にし、「サン川からドン川にいたる大ウクライナ」の創設を要求した。このルテニア人ポピュリストたちが、ガリツィアにおいて「ウクライナ人」を自称した最初の集団であった。まもなく、「ウクライナ人」という名称は、都市の知識人からカルパチアの農民にいたるまで、あらゆる類の集団で用いられるようになった。そ

して、世紀転換期までには、ガリツィアに、様々なウクライナ人政党が出現していた。結果として、ウクライナ人とポーランド人の衝突は不可避となっていた。第一次大戦以前の状況では、ウクライナ人が、ガリツィアを「西ウクライナ」としてウクライナ民族の国家に編入すると主張していたのに対し、ポーランド人は、「東マウォポルスカ」として独立ポーランドに編入することを主張していた。ただし、古くからの住民にとって、これらのナショナリスト運動は「非ガリツィア的」なものとして映っていた。

(15) Dmowski, *Polityka*. s.128-129.

(16) *Ibid.*

(17) Dmowski, *Polityka*. s.129.

(18) *Ibid.*

(19) Dmowski, *Polityka*. s.129-130. ドモフスキは1907年10月30日、ワルシャワから議員として選出された。

(20) Dmowski, *Polityka*. s.130. 絶滅、根絶などと訳される Ausrotten は、オストマルク協会によってスローガンとされ、プロイセン東部におけるポーランド人住民に関して、ドイツの新聞や、プロイセンの政治家の一部によって用いられた。Dmowski, *Polityka*. s.130, note 18. ビューロー（Bernhard von Bülow, 1849-1929）は、1900-1907年にかけてドイツ帝国宰相。

(21) Dmowski, *Polityka*. s.130.

(22) Dmowski, *Polityka*. s.131.

(23) Dmowski, *Polityka*. s.131-132.

(24) Dmowski, *Niemcy*. s.3.

(25) *Ibid.*

(26) Dmowski, *Niemcy*. s.4.

(27) Dmowski, *Niemcy*. s.235.

(28) *Ibid.*

(29) Dmowski, *Niemcy*. s.236.

(30) *Ibid.*

(31) Dmowski, *Niemcy*. s.236-237.

(32) Dmowski, *Niemcy*. s.237-238.

むすび

(1) Dmowski, Roman, “Państwa rozbiorcze jako teren polityki polskiej (styczeń 1904r.)”, in Dmowski, *Dziesięć Lat Walki* (Częstochowa, 1938), s.160-161.

(2) Dmowski, *op.cit.* s.162.

(3) Dmowski, *op.cit.* s.162.

(4) Dmowski, ‘Rewolucja rosyjska’ in, Dmowski, *Polityka Polska i Odbudowanie*

Państwa (Częstochowa, 1937), s.379. ドモフスキは、革命の数週間前に、「〔軍の革命参加が本当なら〕まさにロシアの最後となるだろう」、「〔ボリシェヴィキも帝政と〕同じ屑の山になる」といった発言を残している。 *Ibid.* s.368-369.

⁽⁵⁾ Dmowski, *Nasz.* s.3.

⁽⁶⁾ 岡義武「戊辰戦争終結後における攘夷の風潮」『岡義武著作集 第六卷 国民的独立と国家理性』（岩波書店、1993年）七九頁。これは、明治二年四月、戊辰戦争終結以降の尊攘派および尊攘の風潮の状況を念頭に、日本国内の混沌とした情勢を述べたもの。